

289
SA32
4

海援隊
及土南龍馬



品川陣著



始



672



289
SA32
4

海援隊長
坂本龍馬

品川陣屋



龍馬
山甲
龍馬

龍馬



946
239



目次

龍馬の出世
龍馬の祖先
少年時代
江戸へ
世相の推移
再び江戸へ
良友半平太
龍馬脱藩す
三たび江戸へ
勝海舟を識る

二 三 七 四 三 七 三 二

龍馬脱藩の罪を許さる	二五
海舟在る處龍馬在り	二六
姉への手紙	二七
春嶽公に金策す	二八
龍馬薩藩の食客となる	二九
西郷隆盛を動かす	三〇
薩長聯合成る	三一
桂小五郎の祕盟書	三二
志士の女、龍子	三三
伏見寺田屋の遭難	三四
龍馬の負傷癒ゆ	三五
霧島日記	三六

海援隊由來	一〇
櫻島丸事件	一一
妻龍子月琴を稽古す	一二
龍馬高杉晋作に應援して海戦す	一三
龍馬の戦況報告	一四
將軍家茂の死	一五
高杉晋作の脱藩	一六
野村望東尼の贈り物	一七
高杉晋作の處世訓	一八
高杉晋作の死と望東尼	一九
龍馬、商社を創立す	二〇
後藤象二郎來り盟す	二一

海軍は龍馬、陸軍は中岡	一五〇
海援隊約規	一五一
伊呂波丸沈没事件	一五二
大政奉還の氣動く	一五三
中岡慎太郎稿『時勢論』	一五四
山縣狂介の葉櫻日記	一五五
龍馬の八策	一五六
大政返上論頻々	一五七
中岡陸援隊長	一五八
老獺英國公使パークス	一五九
龍馬愛妻と久々に逢ふ	一六〇
龍馬新金貨鑄造を策す	一六一

山内容堂の言論的建白書	一五五
後藤象二郎の苦衷	一〇一
龍馬ライフル銃千三百挺を購入す	二〇四
瓊浦の別離	二〇〇
龍馬脱藩前科赦免	二一八
生別 死別	二三三
中岡、龍馬に慊らず	二三四
菊が花咲き葵は枯れる	二三七
永井若年寄の密書	二二三
二條城の大政奉還評定	二二七
爲天下萬性大慶不過之	二四四
岩倉具視卿の豹變	二四六



坂
本
龍
馬

平和的建設の裏面

政權挽回の聲巷に姦し

腹がへつた、軍鶏買つて來い

龍馬、中岡刺客に斃る

御瑞夢に現はる

妻龍子の墓

—〔終り〕—

二四

二五

二六

二七

二八

龍馬の出生

維新中興の際、英雄豪傑雲の如く起り、雷の如く轟く中に、其人物、性行、經綸、見識に於て、特殊の面目を發揮した人の中に、我が坂本龍馬其人がある。

一介の浪人者として天下の王公、將相、英邁卓犖の諸雄の前に出でて自身を卑めず、よくその主張するところを強調して、而かも天下國家の爲めに、死を賭して悔まないところ、恂に現下超非常時局に際し、龍馬の精神を生かして此國難に當つたならば、昭和回天の聖業も意のままであらうと思はれる。

徳川時代の末期、浦賀灣頭の砲聲一發に因つて明治維新の幕は切つて落されたが、今や舞臺は廻つて七十餘年、新しい意味での「攘夷」の聲が盛り上つて、眞に一億一心、高度國防國家の建設に邁進しつゝあるのも、思へば奇しき廻り合せと云はばならない。

さるにても徳川の幕政に三百餘年、その權威漸く地に墜ちやうとして昔日の誇りなく、重しい空氣は海内に滿ち滿ち、騒然たる勤王佐幕の争ひは、やがて何事かゞなくては適はぬ天下の形勢となつて來てゐた。

土佐の俊傑坂本龍馬が、この氛圍氣の中に、高知城下、上本町一丁目に呱呱の聲を擧げたのは、仁孝天皇の御宇、天保六年乙未十一月十五日の曉であつた。

龍馬の祖先

土佐の國東北の端、伊豫・讃岐・阿波の國境相接する處、岨々たる四國山脈に、之を貫く吉野川一帯は、前人未踏の天然の要害をなしてゐた。

昨日までは平氏に非ざる者、人に非ずと傲語した一族だつたが、散り敷く秋の木の葉のやうに敗殘の身の置きどころなく吹く、風にも怖れ、溪谷を渡る己れの鞏音にも戦き乍ら、山を越え谷

を過ぎ、河を渡り、茲吉野川のほとりに落ち聚つて一族部落をつくり、今を時めく源氏の世を憚り暮らしてゐた。

それから幾百年、高知城下山田橋の北、宮道の領石驛を経て戸平野越にさしかゝるところの部落、人呼んで才谷と謂ふのがある、ここに住む者は平氏の一族ばかりである。

遠く遡れば元龜天正の昔、遠大の理想を胸に抱く英雄織田信長も、あはれや中國征討の半ばに、明智光秀の爲め本能寺に最期を遂げたが、悪に功名を獲んとした光秀も因果は靦面、伏見の里小栗栖の森に、名もなき田夫長兵衛の竹槍の錆と消えた。これよりさき、弔合戦の名も清く豊臣秀吉は、馬を京師に入れて光秀の根據地、江州比叡の山の麓、坂本城に征め寄せた。旭日に輝く千成瓢箪の馬標、東海道を東に近江路にさしかゝつた時、之を迎へて戦つたのは、光秀の臣、明智左馬之介光俊であつた。

だが、光俊は秀吉の先手、堀秀政の軍と戈を交へたが、武運拙なく只一騎、吹く比叡嵐に墨繪の龍の陣羽織を翻へし、愛馬大鹿毛に鞭を當て、琵琶湖を乗切り「湖水渡り」の琵琶の名曲

を後世に残して、坂本城に退き、自ら城に火を放つて壯烈な最期を遂げた。

光俊の愛妾は光俊との間の幼い一子を刀にかけると忍びず、かきいだいて遠く土佐に走り、才谷の平氏部落に寄る邊なき身を辿り着いた。人々は哀れ不憫とおもひ、よしや惡逆明智光秀を主とする光俊の子であつても、名だたる明智左馬之介の血を斷つに忍びず、之を世繼として其家を繼がせたのである。

幾春秋、その子孫に貨殖に長じた者があつた。——土州の都、高知に移つて才谷屋と號し、豪商となつた。

才谷屋の二男は、祖先を偲んで商人たるに甘んずることが出来ず、好んで武事をたしなみ、郷士の株を購つて遠い祖先の居城に因み、姓を坂本としたのである。即ち龍馬の祖父である直繼に後繼の男子なく、娘幸子に潮江村の山本家から八平直足といふのを養子に迎へた。この人が後年俊傑と唱はれる坂本龍馬の父である。さればこそ弓槍は其得意とするところ、師より免許皆傳を得、能書で和歌にも秀で、軀も巨く、背も高く、所謂文武兩道に達した郷士であつた。

八平夫婦の仲は側（はた）の見る目も睦（むつ）じく、男二人に女三人を儲（たくわ）けた。坂本龍馬は其末（ま）ツ子であつた。

それは、天保六年十一月十四日の夜、父八平は黄金（こがね）の駒（こま）が天（あま）から駈（か）け下りて懐（な）中（ちゆう）に入ると夢見、母幸子もまた蛟（かうりゆう）龍（りゆう）雲（うん）に乗（の）つて赫（あか）々と神火（かみび）を吐（つ）き炎氣（えんき）胎（たい）内（ない）に入ると夢見たので、夫婦は互（たがひ）に此（こ）の奇瑞（きずい）を物語（ものごと）つてゐたが間（ま）もなく、旭（あす）日（にち）東（とう）天（てん）に懸（か）る黎明（れいめい）の頃（ころ）ほひ、龍馬（りゆうま）は産聲（うぶこゑ）高く誕生（たうじん）したのである。龍馬（りゆうま）といふ名前（な）がつけられたのは、此（こ）の夢（ゆめ）の奇瑞（きずい）に因（よ）つてゐたことは勿論（もちろん）である。

龍馬（りゆうま）は生（な）れ乍（さ）ら、顔（かほ）に多（おほ）数の黒子（くろこ）があり、やゝ長（なが）ずるに及（およ）んでは背（せ）に黒（くろ）々と毛（け）が生（な）え、恰（さ）も獸（けもの）の如（ごと）く見（み）えるので、龍馬（りゆうま）も之（これ）を恥（は）ぢ、成（な）長の後（のち）も人（ひと）に肌（はだ）を見（み）せなかつた。だから風呂（ふろ）に入る時（とき）などは絶（た）對（たい）に人（ひと）を近（ちか）附（つ）けず、暑（あつ）中（ちゆう）三（さん）伏（ふく）の候（ころ）など汗（あせ）が淋（しみ）漓（り）と滴（た）つても肌衣（みえ）を脱（ぬ）いだことがなかつた。

父（ちち）に似（に）て體（たい）軀（く）長（なが）大（だい）、劍（けん）撃（げき）に巧（たく）みであつた。村（むら）の人の傳（つた）へるところによると、母（はは）親（おや）の幸子（さいこ）が龍馬（りゆうま）の生（な）るる前（まへ）、可（た）愛（あい）がつてゐた黒猫（くろねこ）を腹（はら）の上（うへ）にいつも乗（の）せてゐたので龍馬（りゆうま）の背（せ）に黒（くろ）い毛（け）が生

えて來（き）たなどといつて、胎教（たいけう）といふものゝ大（だい）切（せつ）なことを説（と）くのであつたさうだが、これは伴（ばん）り話（わ）であらう。

後（のち）年（ねん）龍馬（りゆうま）が土佐（とさ）を奔（は）り、藩主（はんしゆ）山（やま）内（うち）容（よう）堂（だう）侯（こう）を動（うご）かし、王（わう）事（じ）に盡（じん）瘁（さい）した時（とき）、京師（けいし）（京都（きょうと））に在（あ）つて幕吏（ばくし）の眼（まなこ）を逃（に）げるために用（もち）ひた「才（さい）谷（や）梅（ばい）太（た）郎（らう）」の名（な）は其（その）の生（な）家の屋號（やごう）から思（おも）ひ付（つ）いたものであつたらう。

少年時代

こんな龍馬（りゆうま）もその幼（こ）時（とき）は平（へい）凡（ぼん）な子（こ）供（ご）で、「坂本（さかもと）の泣（な）き蟲（むし）」といふ綽（あだ）名（な）で村（むら）人の譏（あざ）りを受けてゐた。といふのはまつたくの臆病（おくびやう）であつたからで、遊（あそ）び仲（な）間（ま）から輕蔑（けいべつ）されてゐた。だからいくら「泣（な）き蟲（むし）」とからかはれても反（はん）抗（かう）も出（で）來（き）ず、自（みづか）らでも泣（な）き蟲（むし）だと思（おも）ひ込（こ）んで了（しま）つてゐた。それでも小（こ）高（たか）坂（さか）村（むら）の手習（てしやく）師（し）匠（じやう）の志（し）和（わ）某（たがし）の許（もと）へ通（と）つてゐた。弟（あに）のこの不（ふ）甲（が）斐（はい）ない有（あ）様（さま）に、何（なん）時（とき）も

人知れず涙を流して鞭撻したのは末姉の、乙女だつた。龍馬にとつて此の姉は實に仲のいゝ、爲めになる友達であり、又母親にも等しい人であつた。何くれと面倒を見て呉れ乍ら、龍馬は今に立派な人間になると信じてゐてくれたのだ。

そんな風で龍馬は志和先生に就いて習ふと四書(論語などの漢籍)の素讀を始めた。泣き蟲のことだから同じ塾に通つてゐても友だちにいちめられたり、からかはれたりしてゐた。或時、この泣き蟲で弱蟲の龍馬が腰に帯してゐた脇差を抜いて友達を追つかけ廻はした事件が起きた。これは弱蟲の兒によくある例で、勘忍袋の緒を切つたといふよりも、盲滅法、自分でもわからず刀を振り廻はしたので、まつたくあぶないことであつた。だから両親は心配のあまり、また、龍馬の身を案じてとうとう志和塾を退學させて了つた。

これで龍馬は文學の方の勉強をする機會を失つて了つた。それからしばらくして十四の齡まで、友達にいちめられて、泣き蟲小僧の汚名を被てゐるうちに、夜更かし癖ができ両親もほととく呆れ返つて了つた。

ところが、それからいくらかたゞないうちに、自宅の近くに日根野辨治といふ劍士が道場を開いたので、その門弟となり、精勵刻苦、是れ勤め是れ勵みといつた具合で、不思議にも性質が一變して、門弟仲間のうちでも嶄然頭角を顯はし始めたのである。文學の方には自信はもてないが、劍道でなら俺は身を立てゝ見せると決心し出した。それからは、もう一生懸命でやつた效空しからず、技が大いに進んで、同門中誰れ一人龍馬と肩を並べる者のないほどになつた。今迄泣き蟲だ弱蟲だと嗤つた村人も、龍馬の入神の技に舌を巻いて驚嘆した。

世の中の人は何とも云はゞいへ

我なすことは我のみぞ知る

當時の龍馬の詠んだ和歌である。これほどの自信が出来たところを見ると、まんざら心からの弱蟲ではなかつたのであらう。それもその筈である。後年彼が國家を憂へての活躍は、この時に芽生えたといつてもいゝであらう。

母の幸子は、龍馬が十一歳の弘化三年乙巳に、龍馬の大器晩成を見ないで、不歸の人となつ

た。龍馬は後年「今少し母に長生きをして貰つて、我が天資の本領を見せたかつた」と嘆いたといふが、さもあることである。

足一步國境を踏み出すには、峻嶮な四國山脈を踏破するか、又は海路に由らねばならぬ土佐であるから、藩士は勿論、凡ての人は水泳の心得があつた。龍馬も亦水泳を習つてゐたが、或る大雨の日、水練場に出掛ける途中、劍道の日根野先生にばつたり遭つた。先生は大雨の中を水練に行ぐらしい龍馬を見て、いぶかしみ乍ら、

「おい坂本、この大雨に何處へ行くのだ」

「はい、水練場に何時もの通り参る途中です」

「この雨の中や誰も水泳は致すまい。第一雨に濡れては困るだらう」

「イ、エ、水に入れば何時も濡れます。只陸上と水中にあるの差があるのみです。風雨何を辭するものぞ——です、先生！」と頗る大見得を切つたものである。日根野先生は可笑なことを言ふ子僧だと、其時は思つたが、後では「將來語るに足る若者だ」と人に語つたといふことである。

ある。

此頃から昔の「泣き蟲」が漸く頭角を顯はし出したが、幼時如何に彼が人後にあつた凡童だつたかは、後日龍馬自らがその兄權平に與へた書翰に——

どうぞ〱昔の鼻垂れと御笑ひ下されまじく候

といふ一節があるのである。ユーモアのある中に潜む一沫の辛味が遺憾なく出てゐる。

龍馬十六歳の嘉永三年、父の命を受け島某氏と共に幡多郡に赴き、或る工事の監督をした。十六歳の龍馬が荒くれ男の人夫を使役し監督すること頗る妙を極めたので、能率大いに擧がり末頼母しい少年だと讃められた。錦を着て故郷に歸るといつた氣持で高知に戻つて來た龍馬は父八平にも劣らぬ六尺有餘の丈夫となつて、嘉永六年十九の春を迎へたのである。

實に坂本龍馬一生の大事は、此の十九の春を期して活躍期に入つたのである。

江戸へ

齡すでに十九、今や日根野門下で肩を並べる者がないうまに腕前は上達した。龍馬は未だ見ぬ花のお江戸に笈を負はせんと、父に請ひ東都遊學の事を思ひ立つた。

自家は財政豊かであるし、一つには不肖兒後年の爲めと父は直ちに之を許してくれた。そして愛兒の門出のひきでもものとして、左の三箇條の訓戒を自分で認め路銀と共に與へた。龍馬は常に此の訓戒書に「守」と認め、肌身離さず朝夕之を誦して護符とした。

守

- 一、片時も不忘忠孝、修行第一の事。
- 一、諸道具に心移り、金銭不費事。
- 一、色情にうつり、國家の大事をわすれ、心得違有間じき事。

右三箇條胸中に染め、修行をつみ、目出度歸國專一に候。以上。

丑ノ三月吉日

老父

龍馬殿

龍馬たらずとも誰か此の父恩に感泣せぬものがあらう。即ち翌四月上旬、初旅の草鞋踏み締め、懐かしき父の膝下を離れ、急がば廻はる瀬田を過ぎ、白扇倒に懸る東海の天を打ち仰ぎ、杜鵑血に啼く箱根の嶮も踏破して、青雲の志一氣に、東海道を足に任かせて急ぎ下り（京都方面より江戸へ行くのを「下り」といひ、その反對を「上り」といつた。即ち皇天子在します方へ赴くのを「上り」といふのである）、江戸藩邸（山内侯）に落付いた。

當時江戸には神田お玉ヶ池の千葉周作、築地新富町の桃井春藏、鍛冶橋外の千葉重太郎、齋藤彌九郎等の名だたる劍士があつた。龍馬は藩邸から一番近い鍛冶橋外の桶町、千葉重太郎先生の道場に通ひ、後に其家に寄宿して日夜劍道に丹誠を凝め出した。

千葉重太郎は千葉周作に對して「小千葉」と呼ばれた程の使ひ手で、水戸藩士に知己が多く

同藩の悲憤慷慨の士とは剣道試合の縁故に依つて互に面識を得、同藩士とも昵懇となり、相往來するうち、晴天の霹靂、米艦浦賀に渡來し、黒艦來る！の聲、翕然として天下の輿論を喚起し、血氣の士は時勢を慨し、天下頗る騒然とした。幕府また之が對策に謀を廻す中に、明くれば安政元年、龍馬は二十歳の春を江戸に迎へたのである。

志士の往復急に頻繁となり、龍馬も漸く各藩の志士とも面識を得た。

此の年十一月、土佐大地震の報は江戸に在る土州人の膽をつぶした。龍馬もまた父や兄弟の身を案じ、蒼惶笈を疊み、晝夜兼行で土佐の地に歸つたのである。

江戸の地に在ること僅かに一年有半、しかも此の江戸遊學に於て、龍馬は新智識を吸収し、事物に對する觀察に一新轉機をつくつたのである。

世相の推移

龍馬江戸に在ること僅か二年、しかも時勢の推移は驚異すべき速度を以て轉廻した。顧れば當時の宇内（日本國中）の形勢果して如何といふに、「黒艦來る」の聲に小さい日本は震動し狂氣せんばかりであつた。嘉永六年米艦浦賀に錨をおろし、國書を齎し通商交易を求めたのだ。陸地へ向けた大砲、轟く一發の砲聲、爲めに幕吏は周章狼狽して爲す處を知らずといふ有様。甲論乙駁——閣老、宗藩、諸藩を召致し會議して之を諮る。幕府の威信は次第々々に失墜して逝つた。

會議は徒らに喧騒に亘り、歸着する處何んらなし——といふ態たらくで、

水戸烈公は——

通商貿易に極力反對し、異邦の驕傲を挫き尙一戰辭すべからず、然らざれば國威失墜し日々に衰頹せん。

と、強硬な議論を維持主張した。

激昂した人民の腦中には、國家なる思想は極めて明白に深刻に初めて印象づけられ、國家と

天皇、天皇と攘夷は相連絡し、尊王攘夷の士茲に初めて擡頭し、水戸烈公が先づ之を唱へたのである。

天下騒然、動搖は始つた。志士出で、烈士起ち、慷慨の士現はれ、腰間の秋水は直ちに皇國の信念を代表し、七寸の鞋五畿七道を遊説し、劍客者間に至るまで尊王攘夷の論に傾聴し、蓬頭突鬢四方に走る。天下を患ふるの士、起たざる可らずであつた。

かゝるうちに嘉永年間も騒擾の裡に暮れて行き一陽來復、明くれば安政甲寅の春、米艦再び浦賀に來り、パークス條約を結んだ。

長州の傑物、松陰吉田寅二郎は、米艦に乗りこまんとして事志と違ひ、芳圖空しく蹉跎した。

信州の志士、佐久間象山また縛に就いた。

天下多事。

國步艱難。

龍馬はこれらの異災を目撃して、心空しく江戸を去り故郷に歸つたのである。

だが未だ彼は起たうとしなかつた。勤王の爲めにも佐幕の爲めにも、將又、開國、鎖國の爲めにも——。彼の胸中に果してどんな成算があつたのであらう。天未だ其の時機を彼に與へなかつたのであらう。只われわれが知り度いのは其の時龍馬の双頬に浮んでゐた微笑と、双眸の悲し氣なる潤ひとが何を物語つてゐたかをである。

再び江戸へ

幸ひ一家は大地震にも變ることなく、一同無事を祝福し合つた。

旅行は活きた學問だ、教育だ、経験だ。一年有餘、足を山川百幾十里の外に伸ばした龍馬に旅は大きな刺戟を與へた。

國に歸つた彼は演武の餘暇に書を読み、古今治亂の要を涉獵し、「黒艦來る」の聲に眼を國外に放ち、西洋の事情に通曉することに努めた。

當時薩南の英主、島津齋彬は蘭人を教師として臺場を築き製鐵所を設けた、土州藩は島津の姻戚に當るので大砲製鑄の方法を視察さすために安政二年八月、藩では筒奉行池田歡藏、砲術師田所左右次の兩名を鹿兒島に遣した。龍馬は其の隨員であつた畫家河田小龍から薩摩の軍備を聞き、近代の戰術は日本刀の時代のみに非ざるを會得した。

風雲何となく急なるを知つた龍馬は――

春くれて五月まつ間のほととぎす

初音をしのべ深山への里

嵐山夕べさびしく鳴る鐘に

こぼれそめにし木々のもみぢ葉

などの和歌數首を國に残し、駿足を伸ばすべく再び笈を負ひ、

男子立志郷出關 學若不成死不歸

埋骨豈墳墓地已 人間到所在青山

と、音吐朗々と口づさみ乍ら、まだ汗ばむ殘暑を編笠に避けつゝ再び江戸を指して發足した。この龍馬再度の遊學の不在中、安政二年十二月四日、父八平直足は大器晩成の龍馬の未だその駿足を伸ばさないうちに妻幸子の跡を追つて、「龍馬！ 龍馬！」と連呼し乍ら愛兒の成功を祈りつゝあはれ鬼籍の人となつたのである。計報を手にして龍馬悲涙をとどめあへず、遙かに江戸の地から故郷の方を拜し、龍馬必ず此の恩に報ふべし。と天地神祇に誓つた。

良友半平太

同藩の先輩、瑞山武市半平太は夙に勤王の志厚く、土佐勤王黨の領袖を以て自任してゐた。當時江戸に在つて築地新富町劍士桃井春藏の塾頭であつた。龍馬は再度の江戸遊學に於て彼と

交遊し、遂に肝膽相照らすに至り、後年武市を盟主とする「土佐勤王黨血盟書」の中に、龍馬が其の名を連ねたのは、實に此の交遊の結果であつた。

武市、名は小楯、半平太は其の通稱である。瑞山と號した。父、弟妹に國學を好くする者を持ち、弟は土佐勤王黨の同志に加はるといつた風な家庭に人と爲つた瑞山は、自然國學に意を致し、やがてそれが發して勤王の志の濫觴となつたのである。

瑞山は顔色蒼白、容貌雄偉で、性沈毅、面上に喜怒の色現はるゝことなく、言葉少し——とあるに引き換へ、龍馬は快活、磊落である。瑞山は劍擊に長じ、青史（歴史）に涉り、畫を能くした。龍馬を大量の人と謂へば瑞山は少量の人であつた。

瑞山は最初の劍術の師千頭氏が嘉永三年に病歿したので、更に上士の師範である高知城下鷹匠町の麻田勘七に就いて子弟の禮を執つた。

當時土佐には土佐人と高知人とがあつた。勤王を論ずるには是非此の區別を明かにしなければならぬ。

土佐人は土着の人民で、高知人は徳川の流を汲む山内家の臣である。勤王を説き、尊王を唱へ、討幕を叫ぶ者は皆土佐人であつて高知人ではなかつた。

上士は高知人で、下士は土佐人である。上士中勤王家と呼ばれるのは僅かに五指に足らぬ有様であつた。

上士に對する反抗、それはやがて土佐人——下士の人々を勤王黨に走らす原因となつた。それに加へて文武修業の爲め江戸へ出て水戸の諸有志その他と相往來した土佐藩の悲憤慷慨の士が、各々國へ歸つて來ては尊王を説くので、勃然として勤王論は下士の輿論として翕然集つたのである。

龍馬の良友半平太は念願叶つて江戸へ——鍛冶橋の藩邸に入り、程遠からぬ眞福寺橋畔新富町の桃井春藏の道場に通ひ、後其塾に寄宿した。凡愚でない瑞山は師に見出され免許皆傳を許され、藩主容堂公の御前に於て上士劍客との試合、及び他藩劍客との立合ひを爲して功名を擧げた。それからは師に連れられて諸家の道場に出で、遂に伊達（仙臺）、仙石（出石）等の諸侯に

知遇を蒙るに至つた。後拔擢されて同塾の塾頭となり令名次第に揚つた。

當時龍馬は、既に再度の遊學を志して江戸の地に在つたから、この熱血の青年二人は、共に俱に國事を談じ將來の提携を誓つた。

龍馬江戸に在ることすでに三年である。齡二十三歳で長藩の桂小五郎や齋藤彌九郎等の塾頭となつてゐた。そして安政五年十二月、路銀一切を塾生に與へ、無一物で飄然江戸を發足して高知城下本町の宅に歸つた。

龍馬は水戸藩の志士たちから天下の形勢を聞かされ新智識を得て、やがて中原の風雲を叱咤せんと機會を覘つてゐるうちに、安政六年九月藩主容堂公に隱居の命が降つた。この間吉田松陰、頼三樹三郎（山陽の三男）等の志士は、壯圖空しく斷頭臺の露と消えるやうな所謂「安政の大獄」事件が爆發した。

次いで、安政七年即ち萬延元年三月三日、井伊大老が櫻田門外に水戸の藩士十七名、薩藩士一名（この薩藩士が大老の首級を擧げた有村治左衛門である）によつて斃された。

程經て彼の「斬奸趣意書」の寫しが土佐に來た時、坂本龍馬が水戸人と交際があるといふので、事の顛末を龍馬に質すと、「諸君は徒らに慷慨してはいけない。是れは誠に君臣の分を盡したのみだ。我輩も他日事に當る時、亦此の様でありたいものだ」と答へたので、一同は龍馬が大志を抱いてゐるのを初めて知つたのである。

親友瑞山（半平太）は文久元年四月再び江戸へ發足したが、龍馬は土佐の地に踏み止まつて髀肉の嘆を洩らしてゐた。

瑞山は天下の形勢を洞察して自己の立場を内省し、自ら同志の決心を固め、然る後に薩長兩藩の志士と共に百年の大計を定む可しとして誓書を作り逐次同志の姓名を署し血判せしめた。その盟文といふのは次の如きものである。

盟曰

堂々たる神州夷狄の辱しめを受け古より傳はれる大和魂も今は既に絶えなんと、帝は深く歎き玉ふ。しかれ共久しく治れる御代の因循委惰と云ふ俗に習ひて獨りも此心を振ひ擧て

皇國の禍を攘ふ人なし。長くも我が老公夙に此事を憂ひ玉ひて、有司の人々に言ひ争ひ玉へ共、却てその爲めに罪を得玉ひぬ。斯く有難き御心におはしますを、など此罪には落入玉ひぬる。君辱かしめを受る時は臣死すると況てや

皇國の今にも枉を左にせんを他にや見る可き彼の大和魂を奮ひ起し、異性兄弟の結びを爲し、一點の私意を挟まず、相謀りて國家興復の萬一に裨補せんとす。錦旗若し一たび揚らば團結して水火をも踏むと爰に神明の誓ひ、上は 帝の大御心をやすめ奉り我が老公の御志を繼ぎ、下は萬民の患をも拂はんとす。左れば此の中に私も何にかくに争ふものあらば、神の怒り罪し給ふをもまたで人々寄つどひて腹かき切らせんと、おのれくが名を書きしるしおさめ置きぬ。

文久元年辛酉八月

武市半平太小楯
大石彌太郎元敬

島村 衛吉重險
間崎 哲馬則弘
門田爲之助 毅
柳井 健次友政
河野萬壽彌通明
小笠原保馬正實
坂本 龍馬直陰
以下百八十三人

右の誓文中「我が老公の御志を繼ぎ」とあるのは、容堂が三條實萬に致した密旨中に左の一節のあるのを指してゐるのである。

一、豊信は一朝事有り錦旗翻るの日は、列藩、親藩を不問、其不臣者討之國力を盡して王事勤めん。是れ平常の赤心、萬々御疑念なき事。

烈々火の如き皇國的信念の制裁、秋毫も假借するところ無き文意には容堂も襟を正して之を受けたといふことである。

龍馬は文久二年正月瑞山の命を受けて長藩に遊説した。次いで二月八日には大阪に出て行った。土藩の勤王決意がいろ／＼な事情で行き悩んでゐるので、龍馬は京阪の動靜を探つて三月朔日歸國すると、もう堪まりかねて脱藩の決意を固めた。

龍馬脱藩す

龍馬は脱藩と意すでに決した。龍馬の兄の權平は祖先の業を護つてゐるやうな堅人なので、今度も龍馬の措置に心を痛めその舉動にも注意してゐた。だから龍馬から路銀を呉れと云はれてもウンと言はなかつたのである。

龍馬は方策盡きて親戚の廣光某といふのから拾餘兩を借り出した。そして近村に旅行すると

兄を救いて、愈々明日は出發しようと張切つて準備をしてゐた。

龍馬の末姉に乙女といふひとのあつたことは前にも書いたが、この姉さんは龍馬の幼い時からよく鞭撻してくれたひとで、龍馬より四つ齡上であつた。

一番上の姉さんといふのは安藝郡安田村の高松家にお嫁入りし、その次の姉さんは城下の柴田家にお嫁入りしたが、その良人といふ人が妾を蓄へたりして夫婦仲が巧くいかない、結婚して僅かに數日で生家に還つて來て腹立ちまぎれに自殺して了つたといふ悲劇があつた。

そんなことがあつたせいにか、この三番目の乙女といふ姉さんは、心も身も女とはいへないほどしつかりしたひとで、「坂本の女仁王様」と綽名されるだけあつて、弟の龍馬と身長もほぼ同じ位の女丈夫であつた。女だてらに——と謂ひたいほど——短銃を弾つことが好きで、夜人無き裏山に登つては短銃を發射し、轟々たる反響にホ、と打笑つたといふ位物凄いとだつた。でも流石このことは龍馬だけにしか白狀しなかつた。父や母は夢にもそんなことには氣付かなかつた。

「つも龍馬に、

「女でさへこの位の膽力がなければならぬ今の時勢なんだよ、お前は男だもの、發奮して、行く末は、天下に名を爲すやうな傑い人になつておくれよ」といひきかした。

こんな姉さんだつたから、龍馬のこの頃の舉動に目をつけ、早くも其脱藩決行を察してゐた。幼少の時から「泣き蟲」の癖に一徹なところのある弟のことだから、悪く留めだてしたところで無駄だと考へ、弟が、日頃からほしがつてゐた兄の秘藏の肥前忠廣を餞けとして與へた——といふよりぬすみ出したのかも知れないが——龍馬は感激して涙がぼたぼたあふれて來るので暫くは顔もあげ得ずその恩を謝し、必ずこの忠廣を奸賊の血汐で塗つて、國家に盡くし、坂本の家名を天下に轟かしますからと、刀を推し戴き首途や佳しと喜び勇んだ。

利録の様な上弦の月が淡く高知城下を照らしてゐる文久二年三月二十四日、一人の武士に送られる足ごしらへも凜々しい二人の武士があつた。地上に長く曳く三つの影——ほゝゑみが自から頬にのぼり、黙々として歩を進めてゐたが、朝倉村で、互にさらばさらばと別辭を交して

ゐた。そこに立つて見送る人は血盟者の一人河野萬壽彌、見送られるのは坂本龍馬と澤村惣之丞の二人である。

翌日は禱原村の那須信吾方に一泊し、宮野の關門を裏道から脱して中國に渡り、長州下ノ關の白石正一郎の許を訪れた。

同志吉村寅太郎は、既に海路を大阪に去つて居ない。そこで龍馬も惣之丞と協議した。

「二人して吉村の後を追つて大阪へ趨くのも面白くないから、俺は九州諸藩の事情を探ることにしてしよう。お主は京師に入り込んで公家の青侍に住み込み、朝廷の御模様や京師方の動靜を探ることにしてはどうか」と龍馬が言つた。

「よからう」と惣之丞は賛成した。

西と東と——固き握手を交はして二人は暫しの別れを告げた。

この澤村惣之丞こそ後日龍馬の片腕と謳はれた海援隊士關雄之助其人であつた。

三たび江戸へ

龍馬は長崎で長藩の久坂玄瑞と會見して共に天下國家を談じ、轉じて東に向ひ長驅して大阪に入り、同志安岡覺之助、檜垣清治を住吉の陣營に訪ふた。その時はもう夜更であつたので住吉神社の社殿に一夜を明かして、翌日檜垣達と北畠顯家の墓に訪で三文字屋に宿り、窺かに時機を待つた。

薩藩の島津久光はすでに入京してゐて、形勢只ならぬ雲行であつた折柄、晴天の霹靂、島津久光の武斷は勤王の志士、有馬新七等浪士の暴動化しようとするのを壓へ、其他の志士を各藩に引渡した。同志吉村寅太郎、宮地宜藏の兩名も縛され薩藩の手によつて土州藩に引渡され、既に國許に檻禁されとの悲報が龍馬の耳朵に届いたのである。

龍馬は地團駄を踏んだ。彼が待ち設けてゐた義兵の旗擧げも空しく水泡に歸した。脱藩第一

の目的は喰ひ違つたのだ。

龍馬の計畫は一頓挫を來たして、一度は落膽したが、更に勇を鼓し四方に遊説した結果、近畿に在る志士の動靜は大方判明した。

さうなると、氣懸りなのは關東の風雲である——形勢や如何、自分の二つの眼で見ても確かめて來たい——三度、東海道五十三驛を江戸の地、花の都へと草鞋の紐を固く締んで出發した。江戸に着いた龍馬は、會て劍を學んだ鍛冶橋外の、小千葉重太郎の道場に草鞋の紐を解き、しばらく同家に滞在して江戸の風雲を窺つてゐた。

勝海舟と識る

當時江戸の地に於て通商開國を叫ぶ者に幕府の軍艦奉行海舟勝麟太郎があつた。——海舟は幕府の旗下である。萬延元年幕府の使節としてアメリカに赴き、文物燦然、宏壯雄大な彼の地

の實狀に肝を潰して歸朝してからは、深く感銘するところがあつて、思ひを航海の事に潛め、砲臺建築を講究してゐた。

勝は當時最も進歩した、所謂ハイカラ黨だつたのである。信州の佐久間象山と意氣頗る投合して、妹を象山の室（妻）とした程である。

勝の歸朝報告に依つて、幕府は兵制を改革し、和蘭に軍艦數隻を注文し、武揚榎本釜二郎を同國に留學せしめた。

——さういふ事情が江戸へ來てみて判明したからたまらない、龍馬は怒り心頭に發して、

「勝、開國を論ずるとは猪口才である。彼は正しく奸物である！ 降魔の利劍我が手に在り、宜しく彼を刺殺すべし」と、文久二年十月、師の千葉重太郎と共に氷川の邸に勝を訪れた。

此の時すでに龍馬は海舟を刺さうと決意して來たのだが、さも事なげに彼に開國論の由來を物穩かに訊いたものである。

勝もさるものであるから、龍馬の心中を察して、

「兩君の御入來は定めし拙者を刺殺しようとしての爲めで御座らう、いや殺氣が貴公等の眉宇の間に漂うてゐられる。拙者敢て御相手を辭するものではないが、先づ一應拙者の議論を聞かれてからでも遅くはあるまいと存するが、如何で御座る」と一本、看破の止めを刺してから悠々と外國に遊んだ時のよも山の見聞を話し、彼の國の陸海軍の盛大なる事、文化の進歩してゐる様の驚くべきこと——その依つて來たところの所以を、縦から横から海舟得意の懸河の辯を振るひ、通商貿易開國論をとら／＼と論じまくつた。

流石の龍馬も整然たる條理に痛く感激し、聞きしに勝る勝の明敏に敬服しないではゐられなかつた。しづかに聞き終つて龍馬は徐ろに口を開いた、

「御明察の如く今宵龍馬、事と次第によつては貴公を刺さうと存じてまゐつたのであるが、只今其開國の止む可らざる事、通商に利益なる航海術の必須なる事共を承はり、盡々敬服し申した。且つは拙者めの不文固陋を恥づる次第で御座る。只今より此の龍馬奴を貴公の門下生として御薫陶賜はれば幸甚に存じ申す」と誠意を面に顯はして率直に叩頭さへした。

勝は龍馬の悠々迫らざる態度、率直純眞な資性に太く感じ入つて、尋常一様の刺客と異り禮儀の正しさに却て海舟の方が敬意を表したい位であつた。勝麟太郎は、「それ程に言はれるならば其任に非ざること萬々ながら貴意に副ひ申さう」と龍馬の門下生たる願ひを容れた。

後年龍馬が海軍に意を用ゐるに至つたのは、此の時の勝海舟の懸河の辯に由るところ勿論大であるが、實は土州藩の舊祖長會我部氏が、十八反帆の大黒丸に便乗して小田原の役に出陣したり、文祿年間征韓の役にも其の勇名を馳せた事を、幼時から聞かされてゐて痛快に思つてゐたのと、もう一つは嘉永年間土佐國幡多郡の漁師が、曾て遠洋漁業の際難船して漂流中をアメリカ汽船に救助され、彼の地の文物を見聞して驚き土佐に送還されてからは其の雄大なる航海術を土地の人に話した所謂「萬次郎無人島漂流奇譚」なるものも小耳に挟んでゐた事などが積み重つて、航海術のゆるがせに出来ないといふ世界的思想が彼の胸中に芽生えてゐたからである。それが海舟によつて新しい火が點ぜられたのだから、彼の負けん氣が一意専心航海術の研究に

没頭し出したのは當然である——そして窃かに天下の動き行く姿に注目してゐたのである。

併し考へてみる迄もなく、

勝海舟は幕府の旗本

坂本龍馬は勤王志士

である。謂はば氷炭相容れざる間柄であるのに、海舟が龍馬を相容れ相許すといふのは、度量の廣さに因るのか、無頓着なのか、それとも冷淡だつたからなのか——この微妙な關係の謎を解く鍵は——海軍航海術といふ小さな人間の立場を越えた眞理の追求、學問の研究といふところにこの二人の偉大な人物の理想が一致したからであると思ふ。

艱難な時代こそ大きな眞理が発見される。そして人間の魂も磨かれる。海舟と龍馬を発見した日本の海軍と海運界とはまことに仕合せであつたといへる。

龍馬が、姉乙女に送つた書簡には——

扱てもくゝ人間の一生はがてんの行かぬは素よりの事、運のわるいものは風呂よりいでん

としてきんたまをつめ割りて死ぬるものあり、夫れとくらべて私などは運がよく、どれほど死ぬる場所へ出ても死なず、自分で死なふと思ふても、又生きねばならん事になり、今にては、日本第一の人物勝麟太郎殿と云ふ人の弟子になり、日々兼て思付所をせい出し居り申候、其故に私事四十になる頃まではかへらんやうにいたし申つもりにて、兄さんにも相談いたし候處この頃は大きに御機嫌よろしくなり、其の御許しがいで申候、國のため、天下のため力を盡しており申候、どうぞおんよるこび願上、かしくとある。この手紙を読んだ時の乙女姉さんのうれしさうな顔が目に見えるやうである。

龍馬脱藩の罪を許さる

勝海舟は門下生數十人中最も龍馬を愛した。彼が驥足を伸ばすのに脱藩してゐる身では何かと不便であらうとの思ひやりから、越前公松平春嶽を通じて赦免の周旋をしてくれたので、遂

に歸藩を許されたが、國法に依り儀式までの申渡しを以て親類預けとなつた。

坂本龍馬

右之者去戌ノ三月御國元ヲ立チ京攝並九州關東邊諸所周旋致罷在今二月十二日御屋敷へ立歸候段方今ノ形勢ニ付忠憤憂國ノ至情黙止件之次第トハ乍申御關所越ノ儀御作法モ有之處窃合逃逸長々罷在事不心得之至依右屹度被仰付筈之處御舍之筋有之御叱之上無別儀仰付之

文久三年二月二十日

右は勝海舟が前年十二月幕府の命に依り幕艦迅動丸に乗組んで龍馬等と共に攝津の海上を測量し、要所に砲臺を築造すべき用務の爲め大阪に向ふ途中、暴風激浪の爲めに船進まず、伊豆下田に停泊したところ、偶々藩主容堂侯が乗つてゐた大鵬丸が同じく暴風雨の爲めに下田に避難して居て偶然にも此處で龍馬は舊藩主の側近く身を置く奇縁を得た。

海舟は容堂侯を其旅館に訪ねて龍馬の人物を稱揚した。

「龍馬儀元來非凡にして徒らに過激の徒といふべきでは御座らぬ。幸ひに彼の脱藩の罪を御許

願ひ度う」

容堂侯固より昔の家來をほめられてうれしくない筈はないから快諾した。すると海舟は重ねて、

「事、酔中の儀に御座れば後日の證據の爲め御印をお與へ願ひ度い」と迫つたので、容堂侯は莞爾として瓢を描き、それに詩を題して與へたといふ逸話が、龍馬脱藩赦免の裏にあつたのである。

龍馬等は、文久三年正月中旬には、すでに大阪に上陸し、京師の間を奔走してゐたのである。

海舟在る處龍馬在り

土佐勤王黨中野屋の如き坂本龍馬は、文久三年四月三日、大久保越中守忠寛から松平春嶽への書簡を携へて京師へ入つた。

四月二十日、朝廷は断然勅命を以て來る五月十日をば攘夷鎮港の期限と仰出され、幕府をして諸侯に布令せしめた。

四月二十三日、公卿姉小路公知は攝海砲臺巡視として大阪に入り、東本願寺に泊られた。姉小路は三條實美と並び稱せられた程の英邁な方で、しかも攘夷論の主唱者である。

龍馬は秘かに勝海舟に謀つて、

「姉小路卿は好んで攘夷を唱へられるのでありますから、此際よろしく航海の實地を踏んで頂き、卿の御眼を啓き、無謀な御考を挫きたいと存じますが……」と建策した。

海舟もこれは好い機會だと思つたので、自分の管理してゐる幕府の汽船順動丸を姉小路卿の巡視用に提供しようと言馬を姉小路卿に謁見せしめて右の次第を申入れさせると、承諾されたので愈々二十八日出發と決定した。

勝海舟は四月二十五日、自ら姉小路卿を訪ねて、海防の事を説いたが、「海舟日記」に當日の事が記されてゐる――

四月二十五日

朝、姉小路館へ至り面會、攝海警備の事を問はる、答曰、海軍にあらざれば本邦の警備立ちがたし云々、長談皆聞かる。即刻順動丸に駕して兵庫港に到られるべき旨あり。

二十八日、望月龜彌太、菅野覺兵衛、高松太郎等龍馬と共に姉小路卿に供奉し、泉州堺浦を發して淡路の加田浦近傍の砲臺を検分して還つた。

船が堺を發して加田へ赴く途中、風烈しく浪怒り、船動搖して卿の従者など眩暈がして起つてゐることが出來ず、卿も色を失はれた程だつた。龍馬はこの絶好の機會を捕へて、卿の館を訪ひ、實地經驗に就き口を極めて海軍の擴張せざる可らざるを説いたのであつた。

眞摯熱心、總て其合理的な論法に卿は大いに悟るところあられた。歸京の後も時々龍馬を召してなほ委しく諮ねられたりした。固より龍馬は應答して倦むところを知らずといふ有様だつたし、師勝海舟の學識拔群、識量高遠、經綸深遠、天下有數の人物たる所以をも、併せお耳に入れたので、姉小路卿は益々海舟を欽慕されるやうになつた。

龍馬は師の評判のいゝのを、勝に話して悦び、勝海舟がアメリカから持つて歸つた「蒸汽機關雛形」「セバストポール戰圖」「コノーフ氏散兵告知幾譯本」などの書籍を師に請ふて之を姉小路卿に獻じた。

卿は大いに喜ばれ之等を教覽に供しようと思へて參内された。そして會議があり夜になつてから退出されたが、その途中朔平門外に差懸られると、突然、覆面した刺客が不意に溝の中から躍り出て刀を揮つて卿の肩先を斬つた。

咄嗟の事だから從臣の金輪勇を呼んで「太刀を太刀を」と求められたが、勇は風をくらつて逃げて了つたか姿を見せない。他の從臣の吉村右京が刀を抜いて賊を追つかけたが、そのすきに傍から覆面装束の刺客が二人躍り出て暗闇の中で卿を圍んで撃つた——卿は一太刀面上に浴び、耳から口にかけて切り下げられたが、屈せず笏を以て之に當りよく防がれた。右京は卿の急を見て引かへし賊と鬪つたので賊は遂に刀を捨て、雲を霞と逃げ去つた。

右京は卿を自邸にお伴れ申したが、「枕！ 枕！」と連呼され乍ら氣の緩むと同時にあへな

く落命された。

急報に接し三條實美等が駆け付け、卿の遺骸を抱きかゝへて慟哭した。これは實に文久三年五月二十日の夜の出来事であつた。

しかも此夜、實は三條實美卿も刺客に狙はれてゐたのだが、從臣が之を探知して輿丁を急がせて邸に歸り着くことが出来たので、その難を脱がれたのであつた。

ところが翌二十一日朝まだき、學習院の門扉に脅迫狀が貼られてあつた。

轉法輪三條中納言

右之者姉小路と同腹公武御一和を名として實に天下之爭論を好む者に付急速辭職隱居不致候に於ては不旬日加天誅殺戮者也。

こんな出来事があつてからは出入に要領するのは勿論、土州藩からは二十名の護衛の士を三條卿に附し、其他傳奏、議奏、國事掛の諸卿にも、各自に其親縁の諸藩から護衛の士を附けるといつた風で、頗る人心恟々たるものがあつた。

姉小路卿暗殺犯人は現場に遺棄した刀から薩摩藩の田中新兵衛といふことが知れ、朝命に依つて會津藩の士が捕へて白洲に引き出し、證據の刀を示すと新兵衛はその刀を執つて自刃して了つた。責任を問はれた薩藩との間にすつたもんだの論争があつた末、薩藩は京師九門のうち乾御門の警衛を免ぜられて了つたので、京都は長州藩の獨舞臺となつた。

姉への手紙

勝海舟は大阪に留つて、形勢愈々急迫してゐるのを見てとると、全力を擧げて神戸海軍所の創設を急いだ。

海舟は其抱負を記してかう言つてゐる。

當時の國勢傍議益々盛んにして彼我相疑相忌同志を募り黨を立て國として紛擾せざるなし、在官有志其如斯を憂ひ法に因て之を縛し之を刑し之に悔心を生ぜしめんとす。曷ぞ

圖らん、徒らに相激怒し相怨望し益々其數を増す、卑職草莽の徒は身を以て犠牲とし其衝に當り高潔を以て自ら期す。人心の向ふ所如此。我是等に關せず之を殺すの拙なるを以て只方向を一致せしめんと大いに鼓舞して他日の用に供するに在り。故に先づ神戸の地に海軍局を設け此輩を集合し船艦の實地運轉に従事せしめ、遠く上海・天津・朝鮮地方に航し其地理を目撃し人情を洞察せしめんとす。幸ひに土州之人坂本龍馬氏我熟に入り此舉を可とし激徒を鼓舞す。又た宇内の有志輩大いに賛成するもの多し。

龍馬が勝海舟に師事するに至つた當時の關係は「海舟傳」に次のやうに記してある。

此頃土州の志士坂本龍馬は匕首を懐中にして氷川の邸に勝を訪ひ殺氣を含んで麟太郎に對面したが、麟太郎より海外諸國の形勢を聞き、海軍振興の急務を識るに及んで飄然自己の狹量を覺り、所謂日本一の人物勝の前に節を屈して門下生となつた。横井小楠が彼に許したのも亦此頃である。翌文久三年一月一度歸品して二月三度大阪に下り、四月將軍内海巡覽に隨從し、神戸に軍艦操練所設立内海警備の直命を蒙り、將軍自から順動丸に乗じて兵

庫和田岬等を遊覽、姉小路少將亦數日を経て視察の結果、海軍擴張、兵器製造の急を認めた。而して幕議は勝に其重任を授けたのである。既にして神戸操練局は建てられ長崎製鐵所其附屬となり、これより着々彼の鴻業は實現せられんとした。彼は兵庫に塾を開いて坂本龍馬を塾頭として東西諸藩の人才を教育する傍ら國事に盡した勝は、漫に鎖國攘夷の可否を論じなかつた。彼は日鮮支の合従連衡を提唱した。桂小五郎も横井小楠も此説に傾倒した。而して龍馬之如きは此説を爲す彼に師事したのである云々。

これで見ると勝海舟も坂本龍馬も、時勢の波に飄弄されながら一步も二歩も身を退いて、海事思想、海外發展の方へ遠大な思ひを馳せてゐたのである。今日の超非常時局と思ひ合せてまことに意義深いものがあるとおもふ。

龍馬は當時の事を故郷に在る姉に左の通り申し送つた。

此頃は天下無二の軍學者勝麟太郎といふ大先生の門人となり、ことの外かはいがられ候て、先づ、きやくぶん（客分）の様なものになり申候、近きうちには大阪より十里あまりの地

の兵庫といふ處において海軍をおしへ候處をこしらへ、又四十間五十間もある船を拵らへ弟子共も四五百人も諸方よりあつまり候事、私初榮太郎なども其海軍所に稽古學問いたし時々船乗りのけいこもいたし稽古所の蒸汽船をもつて近々の内、土佐の方へも乗り申候、其節御目にかゝり可申候、私の存じ付はこのせつ、兄上にもおゝきに御同意なされ、それはおもしろいやれやれと御申のつがふに候間以前申候通り戦でもはじまり候時は夫れまでの命、ことし命があれば四十歳になり候をむかし云ひし事を御引合なされたまへ、すこしエヘン顔をしてひそかにあり申候、達人の見るまなこはおそろしきものとや、つれづれにもこれあり猶エヘン／＼かして。

「すこしエヘン顔をして」云々のあたり近親の者への手紙だけに、人間味横溢してゐて、恂に面白くおもはれる。「達人の見るまなこ」といふのは恐らく海舟が龍馬を見込んで可愛がつてくれるといふことを姉に自慢してゐるのであらう。「つれづれにもこれあり猶エヘン／＼」とは愈々もつて微笑されて来るではないか。

春嶽公に金策す

勝海舟に對して幕府からは海軍所費用として毎年三千兩下付して來たが、失費が多くてとてもそんなこと位では追いつかず、海舟は龍馬を福井に遣はして、松平春嶽公に扶助を請はしめた。

文久三年五月十六日、龍馬は福井に赴いて、來意を春嶽の顧問横井小南に通じ、春嶽への斡旋を乞ふた。そこで龍馬は春嶽に謁し、「攘夷の實行は皇國浮沈の境であります故に、神戸海軍所の成立を急ぎ、人材を養成致し、攝海の警備に當りますれば、皇國の武威は期せずして定り申し、外は以て夷狄の侮りを禦ぐ可しと存じます」と滔々と海防論を唱へ、扶助をお願ひした。春嶽公は肯いて即座に金五千兩を貸してくれた。

龍馬が數日福井に留まつてゐる間に、藩士は相踵いで彼を訪れて來た。或日横井小楠の宅で

藩士光岡八郎（後の由利子）と會見したが、他日龍馬が大政奉還後の經濟策を光岡に諮つたと
いふのは、この時の舊交によるものである。

光岡の日記にはかう書いてある。

龍馬君我藩に來り小楠横井翁の寄寓を訪はる、余亦偶相會し共に時事を討論し談數刻に及ぶ。是れ余が君と相知るの初めにして頗る意氣相投するが如し。爾後弊處へも屢々駕を枉げられ交情愈親密互心肝を吐露す。一日薄酒互に斟む、君、酒間君が爲の國歌を高歌せらる。其聲調朗なり。後弊藩の壯士輩酒間常に國歌を唱歌するは是を濫傷とす云々。

元治元年二月、土佐藩では坂本龍馬、望月龜彌太、千屋寅之助等海軍修業生一同に歸國を命じた。しかし大志ある龍馬はこれに應じなかつた。勿論他の二人も龍馬と行動を共にしたので再び龍馬は脱藩の身となつた。

龍馬にとつては、佐幕か攘夷か態度のぐづぐづ決定しない土佐藩には愛想をつかしてゐたといふほどではなくとも、彼には國家の大局から見たもつとく遠大な抱負があり、小事にこだ

はつてゐられない烈々たる氣概があつたので、謂はば、坂本龍馬を抱擁するには土佐藩はあまりにも小さすぎたやうだとも思はれる。

同じく二月、幕府は勝海舟に命じて長崎に急航せしめた。勿論龍馬は海舟先生と行を共にして十四日佐賀に上陸し、二十三日長崎に出た。

幕府の命ずるところは――

長州藩の砲撃（文久三年、攘夷の急先鋒である長州藩が五月十日米船が長府近海に碇泊したのを馬關の砲臺から砲撃して遁走せしめ、二十三日には更に佛船を砲撃したところ、佛船之に應戦して長藩の汽船を砲撃せしめて玄海洋に退去した。次いで二十六日には和蘭國の軍艦を砲撃して互に砲火を交へ双方に死傷者を出した。又々六月一日には米船を砲撃して激戦、遂に長藩の軍艦二艘撃沈せられた）に激怒した英、佛、蘭、米が諸國聯合艦隊を組織して馬關を攻撃し一舉大阪に到らんとする形勢あるを以て、是等聯合艦隊と和睦せよ――といふのであつた。

二十四日勝海舟は直ちに馬關砲撃中止の交渉をなすべく長崎から立山に到着したが、どこに

も聯合艦隊の姿を認めない。やつと二十六日になつて英蘭の諸艦が立山に入港して來たので、彼獨特の外交祕術をつくして、首尾よく目的を達することが出來た。

三月四日長崎を出發し、六日熊本に到着してから、龍馬をして當歸歸藩中の横井小楠を訪問せしめて、十三日神戸に還つて來た。

六月龍馬は單身京都に入り、勤王志士の間を往復して更に江戸に出で、七月には神戸海軍所に入つた。此月長州藩は大學して東上したのであつた。

龍馬薩藩の食客となる

勝海舟は久しい前から西郷隆盛の盛名を耳にしてゐたので、一度會見して彼の人物を試験してみたいと思つてゐたので、きつかけをつくつて八月、坂本龍馬を使者として京都の薩藩邸に西郷を訪問せしめた。

龍馬は用向をすまして神戸に還つて來たが、西郷の人物に就ては龍馬は一言も發しなかつたし、海舟は海舟でそれを知りたい爲めに龍馬を訪問させて置き乍ら、これもまた西郷のサの字も口にしなかつた。だが海舟は五六日たつて何氣なく龍馬の西郷觀を叩いてみると龍馬は徐ろに口を開いて――

「拙者初めて西郷に會つたのでありますが、その人物、一言以て蔽へば茫漠として捕捉すべからずといふ印象を得申した。もつと突つ込んで申上げれば、西郷は大馬鹿だとも謂へ申さう、だが馬鹿は馬鹿でも普通の馬鹿では御座らぬ、その馬鹿の程度が知れ申さぬ――小さく叩けば小さく響き、大きく叩けば大きく鳴り申す」と不敵な面魂を見せて言ひ放つた。

海舟は之を聞いてから、愛弟子龍馬を自慢して人に語る毎に、「人を見るの標準は自家の識量に在るのぢや、龍馬が西郷を評するの語は、そのまゝ龍馬の人物を見るの標準となるものぢや」と感嘆した。

「海舟日記」に「評する人も評する人、評せらるゝ人も評せらるゝ人」と書いてある。海舟の

眼には大西郷も坂本龍馬も同型に見えたのだらう。

神戸海軍所の寄宿料として幕府から學生賄料毎年三千兩が下付された。それだから諸藩士で寄宿する者が二百餘人に及んだ。海舟は来る者は拒まずとの度量で彼等を待遇したからたまらない、坂本龍馬を頼つて集つて来る者の中には幕吏から注意人物としてその勤靜を見守られてゐるやうな人物も少くなかつたので、いつも幕府からは睨まれてゐた。

ところが茲に愈々睨まれるやうな出来事が持ち上つた、といふのは冬期に近づいたので觀光丸の水夫の防寒用具として多くの毛布を外國から買入れた——是れは正しく長州藩士を匿はん爲めに違ひないと開老に密告した者があつたのだ。といふのは長州藩では折角多くの犠牲を出して夷船を砲撃して攘夷を實行してゐるにも拘はらず、勅命と幕命とはとかく喰ひ違つて業腹でたまらないので、憤激した長州藩では此の上は朝廷に奏聞して攘夷御親征を願ひ奉る外ないと建白書を奉つて、幕府に楯を衝いてゐたので、長州討伐令さへ出た程、幕府の機嫌をそこねてしまつた。この間に有名な七卿落ちの事件などあつた。

そんなわけだから幕府では右の嫌疑事件を名目として、元治元年十月二十一日、突然勝海舟に早々江戸表へ歸府すべき旨を達し、同十一月十日に至つては軍艦奉行の職を免職して閉居謹慎を申付けた。

勝海舟は神戸海軍所が遠からず閉鎖されるのを察したから、江戸へ出發するに先だつて、脱藩中の坂本龍馬等を薩藩の家老小松帶刀に頼んだのである。そこで龍馬は薩藩の食客となつた。

西郷隆盛を動かす

龍馬は薩摩藩の客分として在る間、慨然として日夜思ふのは、今や海内亂麻の如く天下に人材はない。しかも八十餘州の諸侯は無氣無力で共に謀るに足らない。今はたゞ薩長が協調し、相提携して回天の策を講ずる外にはない——と臍を固めたので、此事を西郷隆盛に口を極めて説き進めた。西郷もかねてから同意見だつたので大いに肝膽相照らすことゝなつた。

後年海援隊長として活躍する坂本龍馬は、薩摩を足がかりとしてその巨歩の第一歩を踏み出さうとしてゐたのだ。慶應元年五月、龍馬、西郷等は太宰府に赴いて三條卿に謁し、大いに薩長聯合の策を進言したところ卿も之に賛成されて激勵した。かうして薩長聯合の基礎は漸く定まつた。

元來薩摩と長州とは何等の宿怨といふやうなものはないのだつたが、たゞ開港攘夷の議論が熾んであつた時、薩摩は開港説を持論として幕府に加擔し、京都で長州藩を死地に落すやうなことになつたことであるが、それとても長州の過激な攘夷論と薩摩の開港論との間に意見の相違があつたゞけで、元を正せば皇國を護るといふ點に於ては表と裏といふだけの一身同體のものであつたのだ。

この薩長聯合には長州藩の高杉晋作、桂小五郎（木戸孝允）、伊藤俊輔（博文）、井上聞多（馨）等皆賛成した。

龍馬は五月一日、馬關に行つて桂小五郎に會見を申込んだので、桂は山口を發つて馬關に來

た。龍馬は辯舌滔々天下の形勢を論じて薩摩の内情を述べ、聯合の事をすゝめうながした。

一方桂と西郷とを會見させるために、中岡愼太郎（將來龍馬の海援隊長に並んで陸援隊長として龍馬と影の形に添ふ如く行動を共にした人）が六日鹿兒島城下で西郷に面會して、桂と馬關で會見してくれるやう説きすゝめたので、西郷もその氣になつて共に鹿兒島を發して佐賀關に着くと、急使が京都から來て西郷に急いで上洛を促した。中岡は折角苦心して此處まで西郷を伴れて來たのに桂小五郎にも會見せず京都へ行かれたんでは薩長聯合の好機をのがしてしまふと思つたから百方之を阻止したが、「藩命だから」として西郷は遂に袂を別つて一路京都へ赴いて了つた。

中岡は獨り、しほくと馬關に歸り、事の仔細を龍馬と桂に告げたので、小五郎はかん／＼に怒つて、

「僕には初めから分つてゐたんだ！」と、龍馬と中岡が交々謝罪するのも聽かず桂は山口に歸つて了つた。

龍馬たちが、肝膽を砕いた薩長聯合の大業も、今一と息といふところでこんなことになつて了つたので――

「西郷のこのやり方はまことに怪しからん、長州人は前にも倍して薩摩を憎むやうになるゾ、これは天下の大變だ。中岡、僕を助けて呉れ」と中岡の肩を叩いて流石の龍馬も嘆息した。では一所に京都へ行つて西郷に會ひ大いに談判しようといふことに一決した。

六月八日、龍馬は中岡と共に上京して来て、薩藩邸に西郷を訪ね、開口一番何故馬關に寄つてくれなかつたのかと責めた。

西郷は百万陳謝して辯解に力めた。龍馬は更に長藩からたつてと依頼されたことを話して應援をたのんだので西郷は快く承諾した。

龍馬は右の仔細を長州の桂小五郎に報らせたから、桂は薩摩に相談せずに獨断で伊藤、井上を長崎にやつて薩藩の名前をつかつてイギリスの商人ガラバから銃器及び汽船ユニオン號（櫻島丸と改名）を購ひ入れた。

一度つまづいた薩長聯合の話も龍馬の盡力で茲に一新天地を開くことゝなつた。

龍馬は更に――

「薩藩が如何に雄大でも兵を起す段となれば糧食がなくては駄目です。それには恰度いゝこととに長藩には澤山糧食の貯蔵があります故、それを買入れるといふことに致せば此際長藩の猜疑心もほぐれ、薩摩學兵も容易になり申さう、謂はゞ一舉兩得ぢや」

と智者の智者たるところを謀つてやつたので流石の西郷も、

「それはよかよか」と快諾した。

そこで龍馬は九月二十四日、西郷と一所に京都を發して海路西下し、二十九日下ノ關に到着して糧食讓渡の交渉を開始した。

十月三日、山口に赴いて薩摩方に糧食讓り渡しの事を相談すると萬事うまく行つた。

それで龍馬は馬關へ行つた桂小五郎に會見して、其手續を終つた後、膝を更て桂に向ひ、

「西郷どんが歸藩し申せば、日ならずして兵を擧げるは必定です。是れまつたく兩藩聯合の最

好機會と存じ申す」

と大いに力癪を入れた。

桂小五郎は首肯いて山口に歸る。

西郷は、

「朝廷、幕府に再征の勅を賜はつた。ぐづ／＼はして居れんたい。これは幕府の横車で朝廷におすがり申したのでござす。すべからく兵を起して朝議を回復せにやいかんたい。一刻の猶豫なく幕府の横暴を懲らすべきぢや」と薩摩の藩論を一定して兵を起すことに決し海路を京都に赴いた。

薩摩藩主が近く兵を率ひて関下（京都のお膝元）に入るべしとの急報が來たので、龍馬は上京して西郷、大久保利通に糧米交渉の顛末を告げ、此機を逸せず薩から長に使ひを派して聯合を勧誘せられたい——と説いた。

西郷は黒田了介（清隆）を長州に遣はして、桂（木戸）を京都の薩邸に迎へ兩藩の秘盟を結

ばうとした。

それで黒田了介、大山巖等の薩の密使は三田尻に上陸して山口に到り、好みを通じて和を講じた。ところが茲まで話がとん／＼拍子に進んで來てゐるにも拘はらず長藩の一部には——

「蕞爾たる孤城を以て百萬の大兵に當る。固より勝算許す可らず、然かも力調き矢折れ、寧ろ社稷と共に斃れん。今にして及ばざるを知り、好みを他藩に通じ其力を藉らば後世の嘲笑を招かん、之を拒絶すべし」と言ふ者と、「是れ私事を以て公事を曠するものなり、國家多事、國民一致の時、相分れ相離るは得策に非ず、長藩、薩藩に深怨あるに非ず、今薩摩と大和を以て成を給ふ、拒絶するは義に非ず、坐して亡を得んより力を盡くして存を圖るに如かず」と言ふ者とが對立して甲論乙駁、評議紛々、いつ果てるとも知れない有様に龍馬は痾癢を起したが、穩かに「これは宜しく厚く薩に酬ゆるべきが至當と存じ申す」と諭したところ、桂もまた後説を支持したので、兩者の意も解けて薩長聯合は決せられたのである。

薩長聯合成る

坂本龍馬は桂小五郎に、

「西郷どんは何といつても先輩だ、君の方から京都へ行つて一步彼に譲つてうまくやつたがよからうと僕は思ふ」と勧めた。

中岡慎太郎もまた田中光顯たちと一所に有志の者を歴訪して提携の利を説き、殆ど寢食を忘れるといふ熱心さだ。

十二月二十五日、桂は遂に意を決して品川彌二郎、早川涉、田中光顯、三好軍太郎等と馬關を發して海路を大阪に向つた。

大阪の薩藩邸では春日丸を以て一行を天保山沖に迎へ、藩主の御用船を出して淀川を溯り京都に入らしめるといふ好遇振りを示した。

西郷は急いでやつて来て桂と會見し、相携へて京都薩邸に入り、自分の邸に一旦案内してから小松の別邸に入つた。

それと知らない龍馬は、京都に於ける西郷、桂の會見を一日も早く成就させたいと、長州藩士三吉慎藏、寺内新右衛門及び土州藩士池内藏太等を伴れて、慶應二年正月十日馬關を發し海路大阪に向ひ十七日神戸に着いた。ところが岡山藩の警固最も厳しいので、一泊の後十八日大阪の薩藩邸に入ると、留守居役の木内傳内は、

「貴殿方が其儘で押して行かれるは少し危険ぢやらう。そんな事なら船印を貸して進ぜるから何處までも薩州人ぢやと云ふ事にしてお通り召されい」と親切に萬端の世話をして呉れたので早速其のつもりで行く事にして船の準備をした。

所が、其晩になつて龍馬は三好を伴れて、幕府の老中大久保越中守（一翁と稱し勝海舟一派の人）の宿所へ内々で尋ねて行くと、越中守は急いで龍馬を別室に招いて、

「坂本！ 貴様等が今頃こんな處をうろついて居るなどは危険至極な事ぢや。貴様が長州人

を伴つて京へ上るといふことは、密偵によつてチャンと其筋へ知れてゐる。見附け次第引縛れと申すので、京都からズツとこの大阪表へかけて殿しい探索方だ。儂の手許でも、もうすつかり手配が出来てゐる位ぢや。一刻も猶豫なく立退けよ」と好意ある忠告に龍馬は感謝して薩邸へ戻つて来た。

この時の三好の日記に、

夜に入り大阪城代大久保越中守宿所へ坂本氏訪問に付同行す。越中守より内密示談の趣は坂本等の事は探索嚴重にて目下長州人同行にて入京の旨相知れ其沙汰あり、手配しをれば早々立退き候方然るべしとの事に因り、坂本氏一同切迫の狀態を察し、直に宿所に歸り、用意の短銃（高杉が餞別に贈りしもの）は坂本氏、本込銃は細川氏（池の變名）、拙者は寺町地方にて半鎗を求め、各約を定め、終に上京に決す。

とある通り、十九日未明、薩船に乗つて薩藩士以下四人と記名し、〇に十の字の薩摩の旗幟を船上に建て、大阪八軒屋を出航した。すると新徴組が来て人別を改める。八幡と淀との間は

淀藩、伏見と豊橋邊は水戸藩が警固してくれたが、無事伏見の寺田屋に到着した。

龍馬は翌二十日、三好を寺田屋に残して置いて、細川右馬之介（池内藏太の變名）、寺内新右衛門を率ひて京師に入り、桂を訪問して薩長聯合の首尾を尋ねた。

桂は溜息を大きく吐いて、

「來京してから既に七日にも相成る——それは晝夜鄭重な響應ではあるが、未だ一言も聯合の事に及んで居り申さぬ。さりとて是を拙者の方から切り出せば憐みを乞ふ者となり申す、藩の面目に掛けてさういふ事は出来申さぬのだ。斷然退京と決心し申した。此の胸中を貴公に語り度いため荏苒退京を延期して待ち申したのよ」と苦衷をのべた。

龍馬は聞きもあへず憤然西郷の無情を怒つて、隆盛に會見を申込み、面を犯かして其失當を詰り、かつは色々激勵して、重ねて長藩と提携の急務なることを述べた。

西郷は今更、理の當然に彼の言ひ分に説服されて、呉々も自分の不注意を謝罪し其失當を詫

びた。だが實は、そんな風に桂を扱つて置けば龍馬が義憤を發して怒るだらう、若し義憤を發しないやうならば、長州人に果して薩摩と結ぶの精神があるかどうか疑はしい——と觀たので承知の上での西郷の芝居だつた。深遠謀慮の西郷隆盛としては、自らも速る心を自重しての策略だつたのだ。

二十一日、西郷は小松、大久保と共に桂小五郎を迎へ、龍馬も其席に列なつて實に談笑の裡に所謂胸襟を披き、更らに薩長聯合の秘約を結び、共に國家に盡す可きを盟つたので、疑ひも晴れ、怨みも釋けて十年の知己の如く歡談した。

維新史上特筆大書すべき薩長聯合の義舉は、かうして完全に成立したのである。

桂小五郎の秘盟書

慶應二年正月二十三日、桂小五郎事松菊木戸孝允は大阪に去つて、左の書面を坂本龍馬に送

つた。

拜啓

先以御清適大賀此の事に奉存候、此度は無間マテ御分袖仕候都合と相成事半を不盡遺憾不尠奉存候、乍然終に行違と相成拜顔も當分不得仕事歎懸念仕居候處、御上京に付候而は折角の旨趣も小西兩氏等へ得と通徹、且兩氏どもよりも將來見込之邊も御同座に而委曲了承仕無此上、上は皇國天下蒼生之爲下は主家の爲にオイテも感悅の至りに御座候、他日自然も皇國の事開運の場合にも立至り勤王之大義も天下に相伸び皇威更張之端も相立候節に至り候はゞ大兄と御同様此事は滅せぬ様後來の爲にも明白分明に稱述仕置申度、乍然今日の處に而は決し而少年不羈の徒へ洩らし候は終に大事にも關係仕候事に付必心は相用ひ居申候間御安計は可被遺候、弟も二氏談話之事も吞込居候へ共前申上候通必竟は皇國の興復にも相係り候大事事件に付試に左に事件を相認め申候間其場に至り候時は現に皇國之大事事件に直に相係り候、事ここへ不及して平穩に相濟候ても將來の爲にも相殘

し置度儀に付自然も相違之廉御座候はゞ、御添削被成下候而幸便に御送り返し被遣候様偏に奉願上候

一、戦と相成候時は直様二千餘の兵を急速差登し只今在京の兵と合し浪華へも千程は差置京阪兩所相固め候事。

一、戦自然も我勝利と相成候氣鋒有之候とも其節朝廷へ申上屹度盡力之次第有之候との事。

一、萬一戦負色に有之候とも一年や半年に決而潰滅致候と申事は無之事に付其間には必盡力之次第屹度有之候との事。

一、是なりにて幕兵東歸せしときは屹度朝廷へ申上直様寃罪は從朝廷御免に相成候都合に屹度盡力との事。

一、兵士をも上國の上、橋、桑、會等も如只今次第に而勿體なくも朝廷を擁し奉り正義を抗し周旋盡力之道を相遮り候ときは終に及決戦候外無之との事。

一、寃罪も御免之上は双方誠心を以て相合し、皇國の御爲めに碎身盡力仕候事は不申及、イ

ツレ之道にしても今日より双方 皇國之御爲め皇威相輝き御回復に立至り候を目途に誠心を盡して盡力可致との事。

弟にオイテは右の六廉之大事件と奉存候爲念前申上候様戦不戦とも後來之事に相係り候、皇國の大事件に付き御同様に承知仕候而相違義有之候而は終に斯かる苦身盡力も水之泡と相成後來の青史にも難被載事に付人には必知らせず共御同様に能く覺置度事と奉存候、御分袖後も得と愚案仕毛頭無隔意處を以内々大兄まで爲念申上候儀に付右六廉得と御熟覽被成下自然も弟之承知仕候儀相違之儀も有之候はゞ、必々御存分に御直し被成遣候而此書狀之裏へ乍失敬御返書御認め被下候而幸便に屹度無御相違御投じ被成遣候様偏に奉願上候、實に此餘之處は機會を不失が第一に而、いか様之明策良計に而も機會を失し候而は萬之ものが一つほども役に相立不申、事により候而は却而後害と相成候も不尠。兎角いつまでも正義家は機會を失し候等之事は其例不尠。終に姦物の術中に陥り候事始終に御座候間御疎も無之事に御座候得共此處は精々御注目被爲成候而御論述 皇國の大機必

無失脚御回復の御基本相立候處奉祈候。

乙丑丸（ユニオン號の改稱名）一條、小事には御座候得共、委曲御承知の如く一身に取り候而は困苦千萬に而且海軍興復には屹度相係り候事に付何も遂一御存之譯に付き兼而存じ通に相運び弊國の海軍も相興り候様無此上吳々も奉願候、何分にも小松太夫吞込吳不申候而は實以困迫此事に御座候、隨而海軍は廢滅に至り可申と懸念仕候。

先は前條之次第愚案迂考仕兎角一應可申上と奉存相認め候儀に付前條委曲申上候通之次第に付、得と御熟覽を賜り必々御裏書にて御返書偏に奉願候、其中必々時下御厭第一に奉存上候、乍失敬御序之節、小西吉氏等其外諸彦人可然御致意奉願候、委曲御禮書は歸國之上出し可申と奉存候爲其、勿々頓首拜

正月 念 三

尙ほ本文之處は吳々も得と御熟覽を賜り萬一に承知仕違へ候處は御直し被成遣而必々幸便御裏面御答偏奉願上候

此餘の處は只々機會の處に而已掛念至極に御座候、大事は元より小事にても必成敗は多く機會の失不失に有之申候、此處之義は吳々も御助力皇國之御爲奉祈念候云々。

龍 大 兄

松 菊 生

極密御獨折

（木戸侯爵家文書、坂本龍馬關係文書ニ據ル）

志士の女、龍子

龍馬は笈を負ふて江戸に遊學する道すがら、いつも必ず立ち寄つたのが、京師の志士檜崎將作の家である。そしてその家に宿泊して旅の疲れをしばし安めた。

檜崎は醫師であるが、好んで勤王を唱へ、攘夷を説き、頼三樹三郎等と相往來してゐた。安政五年戊辰の大獄、即ち井伊大老が暴威を振つて、國政を讓する者を引捕ふる際、檜崎もまた

其の網の中の魚となり、獄中で病氣になつてとう／＼斃れて了つた。

當時檜崎の家には妻女と女三人男二人の子供たちがあつた。貯へともないので忽ち生計に窮して了つたのだ。

長女は龍子といひ、男優りの女であつた。三女はきみゑといつて容姿美しい花のやうな娘だつた。しかし昨日までにもかくにも醫師の娘として暮して来ただけに、さて急に、どうして暮らして行けるのか目當もつかない、仕方がないので家具や衣裳などを賣り喰ひにしてゐたが、それとても限りのあることで、一時の急場防ぎに過ぎない。氣の毒にも零落に零落を重ねてゐた。

龍馬は故郷の姉乙女に手紙を書いた。

(前略) 龍女が父檜崎將作は頼三樹等と共に捕へられ、安政の大獄に病死致候、醫者は一代のものにて家に一文もなければ大いに窮し候、親族あれども薄情なる世の中、道具など取りに来るものあれども世話する者は一人も無之候、長女龍と申すは最早二十歳以上なれど

も、もと大家そだちなれば生花茶の道は知れども水仕事をすることは知らず、家具衣裳を賣りたれども此れも限りがあればそれも續かず、まことに困難を極め候、仕合の悪い時は不仕合がつよくものにて、少し残りたる道具さへも池田屋騒動の際、俗吏に没取せられ、いよ／＼困り候へば姉妹泣く／＼相別れ候、龍女は老母と智定院なる亡父の寺に依り候へ共十分ならず、破れ衣を着て居る有様氣の毒千萬に存じ候……

この手紙を書いたのは、龍馬が孤劍、藩を脱して江戸に出で、漂流一年にして京師に歸つて来た時である。熱血の士龍馬たる者涙なくして其の惨状を見るに忍びなかつたであらう。

そこで龍馬は、長男の一郎と三女のきみゑを當時の攝州海軍奉行の勝海舟に頼んで何とか身の立つやうに計らつて貰ひ、龍子だけ伏見寺田屋の女主人おとせに預けたのである。寺田屋は薩藩の定宿であるし、おとせは女ながらも義侠心に富んだ女で、多くの志士を扶けるばかりか才智に長けた所謂「伏見の女傑」と稱讃されてゐたわけであつて、快く龍馬の依頼を受けて氣の毒な龍子を養つてくれることになつた。龍馬はこれでやつとホツとすることが出来たわけで

ある。

龍馬は、また姉乙女への家信の中にかう書いてゐる。

先年頼三樹三郎、梅田源次郎（雲濱）、梁川星巖などの名のきこゑし諸先生たちが朝廷の御爲に世のなんを被りしものありけり。其頃同志にてありし檜崎と申す醫師、夫れも近頃病死なし候ものに其妻と娘三人男子二人、其男子太郎はすこしさしきれなり。次郎は五歳、むすめ總領は二十三、次女は十六歳、次は十二なりしが本十分大家にて暮候もの故、花生、香をき、茶の湯などは致し候得共一向かきぼうこう、（炊ぎ奉公？）する事出来ずいつたい醫師といふものは……（中略）……十三歳の女は殊の外美人なれば悪者すかし島原の里へまい子（舞妓）に賣り、十六になる女はだまして母にいふくめさせ大阪に下し女郎に賣りしなり、五歳の男子は梁田口の寺へつかはせしなり、夫をあね（龍子）さとりしより自分のきものを賣り其錢をもち大阪に下り、其悪者二人をあいてに死ぬるか、こにて刃ものふところにしてけんくわ致し、とふくあちのこちのといふ（ひ）つりけれ

ば悪ものうでにほり物したるをだしかけ、ペラボウ口にておどしかけしに、元より此方は死の覺悟なれば、飛懸りて其者の胸倉つかみ顔したゝかなぐりつけ、曰く、其方がだまして大阪につれ下りし妹をかへさずばこれきりであると申ければ、悪者曰く、女のやつ殺すぞといふ（ひ）ければ、女曰く、殺せ〜殺されにはる〜大阪に下りて居る、夫はおもしろい殺せ〜と云けるに、さすが殺すと云ふわけにはまいらず、とう〜其妹受取、京の方へ連かへりたり、珍敷事なり、彼京の島原にやられし十三の妹はとしもゆかねばさしつまりきづかいなしとて、まづさし置たり、……（中略）……右女は誠におもしろき女にて月琴をひき申候、今はさまで不自由もせず暮候、此女、私故ありて十三の妹五歳になる男子引とりて人にあづけ置救ひ候

別便にて――

兼て申上候龍女は望月龜太郎が戦死の時なん（難）にもあい（ひ）候もの、又御國より出るもの、此家にて大いに世話になり候處此家も國家をうれへ候より家をほろぼし候也、老

母一人龍女いもと兩人男の子一人かつへしとてどふもきのどくと龍女と十二歳になる妹と九つになる男子ともらひ候て、十二歳の妹名きみゑ男子太一郎は攝州神戸海軍所の勝安房に頼みたり、龍女事は伏見寺田屋家内おとせに頼み候、是は學問ある女、尤人物也……云々。

とある。同じ事を幾度も書いたり、年齢が違つたりしてゐるのも思ひ違ひや聞き違ひであらうが、龍馬が如何にこの一家の者たちに關心をもつたかといふことがわかり興味が深い。それらの事情を一番仲のいゝ、好きな姉さんの乙女に書いてゐるところなど「人間龍馬」が出てゐてうれしい。

それもその筈であつた。龍馬と龍子とは琴瑟相和することゝなつたのである。同じ龍の字を名とする二人といふことも何か龍馬にはうれしかつたのであらうと想像される。

伏見寺田屋の遭難

慶應二年一月二十一日、龍馬は京の薩摩藩邸で、桂小五郎、西郷隆盛等と薩長聯合の大業を議したことは前述した通りである。三吉愼藏獨り伏見寺田屋に残つてゐた——當時浪人狩りと稱して志士を討取つてゐた新徴組が、寺田屋に来て極る嚴重に人別を改めた。三吉は二階の夜具入、物置などに忍んで其場を逃れた。

が、翌二十二日の如きは、一橋公宇治へ進發せらるゝの用意だとして戸籍調べが一層嚴重であつたので、短銃とか手槍の類は臥蓐の中にかくして、常にいざといふ時の覺悟はしてゐた。

龍馬は三吉に約束した如く二十三日の夜潜かに寺田屋へ戻つて来て、共々薩長聯合の成功を歡び乍ら、

「明日はお主と薩摩邸へ同行せうぞ」と龍馬は昂奮して言ふので、

「それは頂上ぢや」と三吉は大きに悦んだ。一杯やり乍ら、二人は愉快でたまらぬといふ顔で話し込んでゐると、近くの寺で八刻の鐘が鳴つた。もう大分夜は更けてゐたのである。

すると、伏見町奉行の林肥後守は、龍馬たちが寺田屋に潜んでゐるのを探知してゐたので、捕吏は屋外をぐるりつと取り圍いてゐた。龍馬と三吉は話に夢中になつてゐて、その氣配をちつとも知らなかつた。

かねて寺田屋に預けられてゐた龍子は、恰度風呂場にゐたが、根が利口な女だけに、かすかな登音に、びくつとして、それと察したので、浴衣をまだ濡れてゐるからだにまとふと、物見の樓階を登り、戸外を窺ひ、たしかに捕吏が家中を取巻いてゐるのが見えたので、龍馬と三吉のゐる部屋へとんで来た。

「今、庭口から捕方が来ましたえ」と、氣丈者であるだけに、流石に周章の様子もなく小聲で知らせると、素早く杯盤を片付けて下りて行つた。

——龍馬は、よしつと短銃を引きつけて寄らば撃つぞといふ身構へをすると、三吉も手槍を

執つて蹶起してゐた。

捕方は忍びやかにトン／＼と寺田屋の大戸を叩き、女主人おとせを屋外へ呼び出すと見るや忽ち之を捕つて押へて、手槍を構へ捕吏の一隊は二階へ馳け上つた。

捕吏の中の一人の武士が部屋へはひつて来て、

「不審の儀が御座る故、尋問致す」と云ふが否や部屋の外の一隊の者は亂入しようとした。椅子に凭つてゐた（と文獻にある）龍馬は、

「薩藩士の旅寓に無禮すなツ」と大聲叱咤した。

「何？ 薩藩だ。フフフ、偽り言はれるとお爲になりませぬゾ」

「疑ふとあらば、當地の薩摩邸に照會せられたがよい」

ぐつと詰つた武士は、

「左様か、併し其何の後暗い事も無いと言はれる御仁が、拙者が參つたからとて、事々しく武器を構へてゐられるといふのは何と致された事ぢや」と皮肉に言つてせゝら嗤ふと、龍馬もこ

れには一本参つたといふ顔で、

「ム、これが武士の嗜みと申すものぢやよ」

と、からからと笑つて一蹴したので、捕吏の一隊は遂に手を下すことが出来ず、忽ちどかどかと樓階を下りて行つた。

龍馬は此際に龍子に命じて、敵の小楯となるやうな樓上の障子帳を悉く外さして了つたところへ、お誂へ向のやうにどや／＼と五六人の武装した捕吏が上つて来て、

「松平肥後守（容保は京師守護職である）殿の上意ぢや、神妙に致せ！」と名乗りかけて急襲して来た。

三吉は身を以て龍馬をかばひ乍ら、手槍を抜いて前に構へる。何しる捕方が手籠燈を高く掲げて迫つて来たので、まぶしくつて龍馬にも三吉にも敵の方が見えな——いらだつて龍馬が「我々兩人は薩摩藩士ぢや、京師守護職肥後守の命を受くる仕儀の無い者ぢやツ」と叫ぶや否や、龍馬は暗に向つて短銃を三發射つた。三吉もまた手槍を以て縦横無盡に亂れ突いて出たの

で、たち／＼となつてひるむ捕方の一人が足許の火鉢を抛ると、火華が散つた、龍馬も三吉も意外に捕吏の大勢なのを知つた。

龍馬の短銃は六連發である。無間矢鱈に弾つことが出来ない。だがとう／＼弾丸も竭きやうとした時、捕吏の一人が突如物蔭から躍り出して龍馬の左側に迫つた。——龍馬は引金を引く違もなかつたので、短銃を以て遮つた時に、突き出した銃の穂先が銃身に當つて火華を散らしたと思つたら、拇指を傷けて了つたので、もう弾つことが出来ない。

三吉は手槍をりうりうと扱いて獅子奮迅と突き出し又防ぐ。捕吏はこの豪雄二人の手にかゝつて殺られる者、手負ひになる者が續出した。たまらぬと思つたか階下へ逃げ去つたので、三吉は奮然之を追跡しようとしたのを龍馬は、

「君、君、犬死は無用ぢや。こ、この間に！」

血路を切開いて逃げようと三吉を寺田屋の背後に引つ張り出した。

敵は唯だ表口を取り圍んでがや／＼やつてゐるだけで最早迫つて来ない。二人は物置を切抜

け二軒ばかり戸締りを切破つて挨拶して巷路に逃れ出た。犬が頻りに吠えりと、ソレツとばかり思ひ出したやうに捕方が追跡して来た。二人は五丁程逃走して来たが、龍馬は二三日前から微病後なのでもう足が前へ出ない。だが茲で捕り殺られたんでは犬死だと思つたから、横町に入り、水門を潜り、某家の裏門から河岸に出ると、材木置場が路傍に在る——其棚の上に二人共へばりつくやうに伏せて、

「坂本氏、もう拙者は駄目です」

「もう活路は無いかも知れん」流石の龍馬も弱音を吐いた。

「捕吏の手にかゝつて最期を遂げるより、いつそ自殺しませう」と三吉は大きく息を弾ませてゐる。

「まア待て！ 死は固より覺悟の前だが、然し薩摩邸はもうさう遠くはないゾ。お主、俺にかまはず急いで行つて報告してくれ。不幸、今こゝで捕吏に會へば最後の戦を交へて俺は斬り死にする。もう夜明けに間もない。ぐづぐづせず早く行き玉へ！」と龍馬は三吉を激勵した。

仕方なく三吉は小川の流れて衣服の血糊をさつと洗つて、旅人のやうに紛らして薩摩邸へと重い足を運んだ。

時漸く東天紅。三吉が薩邸の門を叩く。素破とばかり大山彦八が三吉を迎へ入れ乍ら、

「昨夜の出来事はもうお龍殿が来て報らせて呉れたゾ。お主達二人の踪跡如何と皆々案じ居つたところだ。でもよかつたナ、坂本氏もこの近くまで来られれば、もう大丈夫だ、まつたく天の幸だ」と言はれて、三吉は龍子の機敏な行動に感じ入り乍ら、龍馬の潜伏場所を大山に告げたので、大山は三吉を休憩させて置いて、二三人で小舟に薩摩の幟印を樹て、龍馬の潜伏場所に到り、皆々龍馬の無事な顔を見て覺えず歡聲を擧げた。

龍馬は薩邸に入つて急を京師に報らせた。西郷隆盛は幕吏の無禮を怒つて自ら銃を執つて起ち上らうとしたが、周囲の者に押しとどめられて、やうやう腹の蟲を抑へた。吉井幸輔は馬で伏見に来て薩邸に龍馬等を慰問した。

西郷は一人の醫者を送つて龍馬の負傷を療治させた。今後萬一の事もあるかも知れないと心

配して兵一隊を護衛に附けた。

幕吏は、逃走した二人の行方が知れないので、寺田屋を搜索して、手槍短銃の類から書類金子に至るまで、龍馬や三吉の身についた物を没収したり、改めておとせを召喚などして探索を愈々嚴重にしたが、五六日経つて、やつと二人が薩摩邸に匿はれてゐることを知つた。

「お尋ね者の坂本龍馬と長州武士一人、確かに貴藩邸へ馳け込んだと申す訴へが御座る。就いては速かに右兩人の者お引渡しを願ひ度い」と申込んだ。しかし大山彦八は何をつまらん事と言ふのだと云ふやうな顔をして、

「左様の者は當藩邸には一人も居り申さぬ。折角の御來意で御座るがお断り申す」と、劍もほろゝの挨拶でキツパリと撥つけて了つた。

町奉行では止むなく四方に人相書を廻はし、觸狀を散布して二人の外出時を狙つてみたが、それらしい者の出入りもない。さうかうしてゐるうちに一週間も過ぎて了つて二月一日になると、大山彌助が更に兵一隊を率ひてやつて来て西郷の内意を告げ、龍馬、龍子、三吉の三人を

護衛して京都の薩摩藩邸に入つた。

龍子はそこで龍馬の傷手當てから看護萬端に心を籠めて仕へたので、龍馬はその眞情にうれ終に龍子を正妻として娶り、之を西郷等に披露したのである。龍馬はこの龍子を同志槍崎將作の遺兒として何くれと面倒みてゐるうちに、しつかりした女性だといふこともわかり、何か心に仄々とした温かいものを感じてゐたことは事實である。東奔西走のあはたゞしい行旅の一日二日を京都に立ち寄つたのも、この龍子を見たいといふ氣持が青年龍馬の胸の中になかつたとは云へないと思ふ。まして逆境に落ちてゐた氣の毒な一家への同情が、勤王を精神の糧とした龍馬の純粹な情感をゆさぶつて清淨な「愛」へ移行せずにはゐなかつたらう。——英雄色を好む、といふやうな卑俗な言葉は、人間の心の尊さを知らぬ者たちの貧しい表現でしかない。龍馬がこの龍子への優しい思ひやりのみならず、故郷で彼を可愛がり且つ激勵してくれた男優りの姉乙女の感謝を忘れずに、心急ぐ勤王往來の旅宿の灯のもとで、絶えず手紙を書いて、身邊のことを——まして龍子一家のことを再三消息してゐたといふ「優しい」心根を、讀者は充

分窺ひ知らるるであろう。

海舟勝麟太郎先生への師恩に篤いこと、姉乙女への感謝の心、龍子一家への情けある處置、盟約した人々への厚い信義——これら凡て人間としての最高の値打をもつてゐた坂本龍馬を、わたくしは禿筆を架して其傳記を艸し乍ら畏敬せずにはゐられないものである。

……私の危き時よく救ひ呉候事もあり、萬一命あればどふかして遣はしたしと存候、此女乙大姉をして眞の姉のよふ（やう）にゐい（ひ）たがり候……今年正月二十三日の夜、難に遭（ひ）し時も此龍女があればこそ龍馬の命は助かりたり、京の屋敷に引取（つ）て後は、小松、西郷などにも申私妻と爲知候、此よし兄上にも御申可被遣候……云々。

と、又々乙姉へ家信を出してゐる。龍子が逢ひたがつてゐるといふあたり、龍子へ語る龍馬の姉への感謝が如何に深かつたか、……さぞやこの手紙を読んだ乙姉も、弟の嫁女龍子に逢ひたがつたことであらう。

龍馬の負傷癒ゆ

幾程もなく龍馬の負傷は癒へた。

薩藩では聯合の答禮使として藩士村田新八、川村與十郎を長藩に送るに決したので、龍馬は桂の書即ち一月二十三日發の書面の裏に桂の希望通り、左の朱書をして之を託した。

表に御記被成候六條は小西兩氏及老兄龍等も御同席にて談論せし所にて毛と相違無之候後來といへども決して變り候事は無之は神明之知る處に御座候。

丙寅二月五日

坂本龍馬

更に左の別書をも桂にことづけた。

此度の使者、村新同行にて參上可仕なれども、實ニ心ニ不任義在之故ハ、去月二十三日夜伏見に一泊仕候處、不計も幕府より人數さし立、龍を打取るとて、於八ツ時頃二十人許

寢所に押込み皆手こと鎗とり持、口々ニ上意々々と、申候に付、少々論辯も致候得ども、
 早も殺候勢相見候故、無是非高杉より被送候ピストルを以て打拂一人を打たをし候、何
 れ近間に候得へさらにあだ射不仕候得ども、玉目少く候得へ、手ををい(負ひ)ながら
 引取候者四人御座候、此時初三發致し候時、ピストルを持し手をも切られ候得ども、淺手
 ニて候、其ひまニ隣家の家をたゞき破り、うしろの町に出候て、薩の伏水屋敷に引取申
 候、唯今は其手さず養生中にて參上とゞのはす何卒御仁免奉願候、何れ近々拜顔萬奉謝候
 謹言々々

二月六夕

龍

木圭先生机下

(木戸侯爵家文書)

桂は右の手簡を受取り「龍大兄へ御急披 木奎より」と表書した次の返書を龍馬に送つた。
 朶雲御投與奉拜見候、彌以御壯榮ニ御起居大賀此事ニ奉存候、さて先般上京中は大兄之
 御深意ニ而微意も徹底感喜難忘奉存候、自浪華呈候六條之書御返與御裏書拜見安堵仕居申

候、此度は村田、川村、木藤諸氏遠路態々來訪欣喜此事に御座候、誠ニ暫之滯留に付何事
 も残念而已御察可被下候、小笠原閣老も下齋今以異氣に而更に何事も無之紀、彦、小倉尤
 惡敷由神原、雲州などが是へ雷動いたし候而、騒ぎ候様子、外藩諸侯ニ而ハ獨り肥後が尤
 姦邪と申事に御座候、近況は村田諸氏々直に御承知可被遺候、何よりも目出度事は、大兄
 伏水之御災難ちよつと最早承り候ときハ、骨も冷く相成驚入候處彌御無難之様子巨細承知
 仕不堪雀躍候、大兄ハ心之公明と、量之寛大とに御任せ被成候而、兎角御用捨無之方に御
 座候得共、狐狸之世界か、豺狼之世間か、更に相分らぬ世の中に付、少數天日之光り相見
 へ候迄ハ、必々何事も御用心神州之爲御盡力肝要之御事ニ奉存候、不遠戰場ニも至り可申
 何分にも天下之事ハ、只々機會を失と不失ニ有之申候、いかなる良策ニても機に後れ候而
 は、萬端 覺束候、石川兄も先日御上京當時ハ御同居ニ候哉、大兄伏水之事を承り候故、
 御氣遣申候、細川兄ハ御無事ニ御座候哉、諸兄吳々も御疎なく御注意賊手ニ御陥り無之様
 偏ニ奉祈念候、乍此上精々御自愛肝要ニ奉存候、先ハ取急如此御座候、勿々頓首九

拜。

二月二十二日

木 奎

龍大兄御急披

(坂本彌太郎氏藏)

如何に龍馬が亂麻を斷ち荆棘を刈つて薩長聯合の爲めに盡力したか、今更言ふまでもないが、桂がそのことを如何に感謝してゐたかも、この手紙をみてもよくわかるとおもふ。

霧島日記

小松帶刀、西郷隆盛、吉井幸輔相共に薩長聯合報告の爲め藩に歸ることゝなつたので、恰度いゝ機會だからと坂本龍馬夫妻並に三吉慎藏の三名もこれに同行して京都を出發し、三月一日大阪薩邸に到つて、四日薩摩の汽船三邦丸に搭乘した。西航して六日の夕馬關に着し、三吉は一同に別れを告げて長府に歸つた。

一行はそれから長崎を経て、十日鹿兒島に到着し、龍馬夫妻は小松の邸に假寓した。

吉井は龍馬の健康がまだどうもはかくしくないので心配し、轉地療養をしきりと勧めた。

そこで四月にはひつてから吉井の案内で龍馬龍子の夫妻は、霧島山の近傍の日當山温泉に入湯して、それから潮濱の温泉へ移つた。此地には和氣清麿が昔庵を結んだといふ陰見瀧といふのがあつて、其處へも遊びに行つた。

閑雅幽靜といふ形容詞通りの別世界で、潺々淙々と流れる清流に釣糸を垂れたり、蔚蒼たる森林に短銃を放つてみたり、まことに悠々自適を十日ほどを送つて、それから更に霧島山の温泉に赴いた。

山に登ることにした。霧島山は屹然として海拔五千尺、日向、大隅、薩摩の三州に蟠り、奇峭亂立、山路險惡といふ文字通りの物凄い山で、龍馬は新妻の龍子の手を取らんばかりにして羊腸たる山道を辿つて行つた。

村を過ぎ、嶺を越え頂上に達した。ところが山の嶺には一物もない。只在るのは青銅造りの

劍に天狗の面を飾つて立つてゐるところの世人の所謂『天の逆鋒』ばかりであつた。龍馬は妻の方を向いて、

「骨折つて登つて来て、天狗の面を見たばかりだな」と冗談を言ふと、龍子は、

「オホ、、、」と他愛なく笑ひこけた。いたづらに二人で力いつぱいに逆鋒を引き抜いてみたが、

「いけずしましたえ」と龍子が頸をすくめると、龍馬も、

「天狗の罰が當るかな」と、又元の通りに立てゝから、あたりを振りかへつてみると、廣々として目も遙かに、三州の群立つ山々は二人の脚下に在るし、千里一望といふのか一點の眼を遮るものもなご。

だが、四月も半ばではあるが山の上は流石に寒さも残つてゐて風邪を引きさうなので、名残惜しくも山を降り、霧島の宮に一泊してから、氣を利かして霧島温泉で待つてゐてくれた吉井と一所に鹿兒島へ戻つて來た。

その當時の龍馬の日記をひらいてみよう。

十六日

大隅霧島山の方、温泉に行。鹿兒島の東地七里許りの地濱の岸に至る。但し以舟す。夫れより日高山に至る。

十七日

シヲヒタシ温泉に至る。

二十八日

霧島山に着す、温泉所に泊す。

二十九日

霧島山上に至る。夫れより霧島の宮に宿す。

三十日

温泉所に歸る。

八日

日當山ひあたりやまに歸る。

十一日

濱はまの市いちに歸る。

十二日

濱はまの市いちより上舟ふねにあがる。鹿兒島に歸る。

まことに簡單かんたんなものだが、龍馬にとつても龍子にとつても、この一ヶ月ばかりの旅は終生しゅうせいの思おもひ出でとなつたであらう。

龍馬夫妻の霧島登山の事は姉乙女への書信に詳くわしく認しためられてゐる。

：今年ことねん正月二十三日夜のなんに逢あひし時ときも此龍女が居ればこそ龍馬の命いのちは助かりたり、京の屋敷に引取ひきとつて後は小松西郷などにも私妻と申爲知候此由このよし兄上あにがみにも御申可被遺おんまをらしかはされぞく候、御申上ぐれば京都柳馬場三條下る所このところ：此所に住すまし、國家の難と共に家は亡びあとな

くなりし也：：檜崎將作ひらさきまささく：：死後五年となる：：同妻存命、私妻は則將作女也、今年二十六歳、父母の付たる名、龍、私が又輶こまとあらたむ：：(中略)：：是より三月大阪に下り、四日蒸氣船に兩人共にのり込み、九日に長州に來り十日に鹿兒島に至り、此時京留守居役吉井幸輔もどふく(同道)にて船中ものがたりもありしより、又温泉に共(に)遊ばんと吉井が誘まねひにて、又兩人づれにて霧島山の方へ行(く)道にて日當山の温泉に止まり又しおひたし(潮漬)と云ふ温泉に行(く)、此所はもう大隅の國にて和氣の清麿が庵いほりを結びし所、隠見かくみの瀧、其の瀧の布は五十間も落(ち)て中程には少しもさわりなし、實に此世の外かとおもわれ候ほどのめづらしき所なり、此所に十日計りも止りて遊び、谷川の流ながれにて魚を釣りピストルをもちて鳥をうちなど實じつにをもしろかりし、是より又山深く入りて、きりしまの温泉に行(き)此所より又山上さんじやうにのぼり、あまのさかほこを見んとて妻と兩人づれにてはるく上りしに、立花氏の西遊記さいいうきほどにはなけれども、どふも道ひとく女の足にはむつかしかりけれども、とふく馬のせごまへまでよぢ登り、此所にひとやすみ

して又はるくとのぼり、ついにいたゞきにのぼり、かの天の逆鋒を見たり、其形は
 是はたしかに天狗の面なり、兩方共に顔のつくり付けてあるから、かね
 なり、やれく〜と腰をたゞいて遙々のぼりしにかよふ（斯様）なるを
 もい（思ひ）もよらぬげにをかきかほつきにて天狗の面があり、大に二人が笑（ひ）たり、
 此所に來れば實に高山なれば目のとゞくだけは見へ渡りおもしろかりけれども何分四月で
 はまだ寒く風は吹（く）ものだからそろく〜と下りしなり、なる程きり島山つゝじ一面に
 はへて實つくり立（て）し如くきれいななり。



其の山の影は



サカボコ

此穴は火山のあとなり、渡り三丁計りあり、すり
 鉢の如く下を見るとおそろしきやふなり
 此間は山坂焼灰計にて男子でものぼりかねるほど
 きうなることたとへやけ土さらくすこし泣そう
 になる五丁も上ればはきものが切れる程左右目
 の及ばぬ程かすんでをる餘りあぶなく手を引き
 行く
 此間のかの馬の背越えなり此間は大に心やすくすべり
 ても落る事なし

逆鋒は少し動かして見たればよく動くもの又あまりにも兩方へ鼻が高く候まゝ兩人が兩方

よりは、なをおさへてエイヤと引ぬき候へばわずか四五尺のものにて候間又々元の通りをさめたり、霧島山より下り、霧島の社にまいりしが、此處は實に大きな杉の木あり、宮もの古り極めてとふとかりし、其所にて一宿、夫より霧島の温泉所に到るに吉井幸輔も待つて居り、共に歸り、四月十二日に鹿兒島にかへりたり……（下略）

海援隊由來

幕府の末路に當つて海援隊といふ強力な、氣概のある『社中』があつた。天下を憚る者なく横行闊歩した。昭和の今日岩崎男爵を中心とする三菱コンツェルンは、實にこの海援隊の轉身したものだと言はれてゐる。

海援隊の起源は？——文久二年十月、攘夷督促の勅使三條實美、姉小路公知の二卿が江戸に着し、江戸城に登城するに際し、乗輿を玄關に横着けにしていゝかどうか問題になつて議

論紛々、どうしていゝのか決定を見なかつた時、恰度坂本龍馬が航海術研究の爲め江戸に来てゐて、勝海舟の塾にゐたので、彼が斡旋盡力して、遂に玄關横着けが許可されたのである。

龍馬といふ一介の浪人武士に、何故かういふことを扱ふ腕があつたかと思はれる。「善」が、是れは彼に「善」といふものゝ概念がはつきりしてゐたからであると思はれる。「善」とは社會の爲めになることをすることである。即ち「大善」である。格式のやかましかつた幕府、いかに衰微が見えてゐた幕府でもおれそれと其の長い間の因縁を破る決心はつかなかつた筈である。ところが一介の浪人武士の斡旋を容れたといふのは、三條とか姉小路といふ攘夷派の公卿だからといふところに幾分讓歩もあつたらうが、幕府とてもまだ心から攘夷派に頭を下げ切つてゐなかつた時であるから、頑張れば頑張れたのであるが、何しろ坂本龍馬といふ無鐵砲な、いゝと思つたことなら身命を賭してやり遂げるといふ熱情の固りみいたいな人にぶつかつて來られては流石幕府の重役共も手が出なかつた。

それと龍馬にとつていゝことは、其時一つの大義各分をもつてゐたことである。——それは

「方今國難に當面してゐる日本は須らく海軍を設置せざる可らず」といふ信念を持つてゐたので三條、姉小路二卿の玄關横着け問題を煮汁にしてといつては言ひ過ぎだが、少くともそれを手がかりとして、かねて機會を狙つてゐたことなので幕府へ海軍問題を併せ建言したのである。一方越前の大名松平春嶽公を説いて、京師を警固するために、攝海（攝津國の面してゐる海）に砲臺を設築すべしといふ輿論を喚起させ、更に土佐藩の參政小南五郎右衛門に圖つて、土佐青年に航海術を學ばせることに成功した。

さういふ事の積み重なりが實を結んで神戸に「海軍所」が設けられることになり、龍馬の恩師海舟勝麟太郎が「海軍奉行」に任ぜられた——讀者は、前の頁でそれらの事實は知つてゐられる筈だが、そのいはれ因縁故事來歴といふものは、一に坂本龍馬の「熱」と「力」との賜物以外にないのである。海舟も偉かつたが、その大きな齒車を回轉したのは龍馬であるといふことを記憶して欲しい。

勝海舟、坂本龍馬等は幕府の命令に依つて大阪に回航後、文久三年正月、高松太郎、望月龜

彌太、千屋菊太郎、新宮馬之助等を航海術生徒として、勝の熱に學ばしめた。是れ實に「海援隊」の端緒となつたのである。十月神戸に海軍所が建設せられ、薩長土から來り學ぶ者二百餘名に及んだ。

ところがである。月に叢雲花に嵐の譬の如く、慶應元年二月、勝海舟嫌疑を被つて（前掲）江戸の私宅に蟄居して了つた。

手なれつる玉の小琴の緒をたゝく

古りし調べはきく人もなし 海舟

勿論神戸海軍所は閉鎖された。勝熱の諸生徒はちりぐばらぐばらになつた。

師は去り、大方弟子は四散して諸藩に走つて了つた——だが、それでも志を同じくする者は少しはあつた。それらの者が集つて一團となり「社中」と謂つてゐたが、後改めて『海援隊』と稱ぶことにして坂本龍馬を首領に押し立て、薩摩藩に援助を仰ぎ、長崎に本據を定めて結東を固くしてからといふものは、もう矢でも鐵砲でも持つて來いといふ勢ひで、その威勢のい

ことゝいつたら、誰れも彼れもウンともスンとも言へない程の羽振りになつた。

櫻島丸事件

慶應元年七月、前にも書いたやうに、長州藩で龍馬の盡力に依つて薩摩藩の名を藉りて、長崎のイギリスの商人ガラバから汽船櫻島丸（舊名ユニオン號）を購ひ入れた時、龍馬は薩長兩藩と『平素は之に同志を乗せ、航海操船を實習せしめ、機會あらば更に北國、九州、大阪に航海し、貿易を營む傍ら、四方の形勢を視察せしむる』といふ契約を結んだのである。

櫻島條約

- 一、旗號者薩州侯御章御拜借之管。
- 一、乘組之者は多賀松太郎（高松太郎）、菅野覺兵衛（千屋寅之助）、寺内信左衛門（新宮

馬次郎）、早川次郎、白峰駿馬、前河内愛之助（澤村總之丞）、水夫火焚從來召連之者を以て航海仕り候管、尤御國よりは士官二人乗組可申管。其他水夫火焚等不足之分は加入可申候。

- 一、船中賞罰之權士官共承可申管。但始て馬關到着之節前河内愛之助、上杉宋次郎（近藤昶）、井上（聞多）氏に對座の節御國之御方と雖も無差別御作配申様御沙汰有之候事。
 - 一、六百兩金子は士官共預り可申管。
- 右は前河内愛之助、多賀松太郎、上杉宋次郎三人、井上氏に對座之節相極り候事其仔細は兼て商賣の權は士官共承候管之處俗事方乗組に相成管に相定候に依て右様相極候事。
- 一、船中諸修復食料薪水等士官水夫火焚之給料其他總て之雜費は御國より御賄之管。
 - 一、御國御用命之節は薩州侯御用向相辨可申管。

右六ヶ條者御國產物當時諸國御差間に付薩州侯御章御拜借之上社中乗組候様御頼に付右之次第盟約に相極候事。

坂本龍馬

慶應元丑九月

中島四郎殿

坂本龍馬殿

一〇二
上杉宋次郎

(井上伯傳ニ據ル)

かういふ取極めはしても、櫻島丸は何といつても長州藩の所有なので、話がこぢれた場合困るので、龍馬は別に一船を獲得して『社中』専用にしたものだと考へたから、十一月長崎へ赴いて、高松太郎をして新に洋型帆船一隻を購ひ入れさせた。龍馬の日記に次の如く書かれてゐる。

船買主興三郎、請人小曾根英四郎、周旋多賀なり。

二十二日

フロイセン商人チヨルチーに面會す。船買入及商法を談ず。

二十三日

船見分。此の日夷よりも奉行へ引合、邸留守居へ談ず。

二十四日

朝、邸留守居へ行。但留守居は汾陽五郎右衛門也。

二十五日

朝五時頃より吳半三郎と亞商と取替ゆる法案紙成る。

二十八日

船受取。

是れが帆船ワイル・ウエフ號で、船價七千八百兩、小松帶刀が特に之を龍馬に貸してくれたのである。

龍馬は新船に薩摩の章を樹て、同志黒木小太郎を船長に、池内藏太、浦田運太郎を士命に

坂本龍馬

一〇三

任じた。

龍馬は、近藤に、

「かねての願望が叶つて愈々これで二艘を『社中』で自由に使用することが出来ることゝなつたから、これからは操船を巧くやつて貿易視察に便して貰ひたいもんだ」と上機嫌に話した。そこで近藤は馬關へ赴いて、長州の井上聞多に會見して、櫻島丸の使用權を獲得すべく種々交渉したところが意外にも、

「櫻島丸をあんた方『社中』の専用といふ御要求はちと無理ぢやらう。元々取極書もあることぢやからお貸し申さんと言ふぢや勿論ないが……。實は船名も乙丑丸と改稱して了ふて、當藩の中島四郎を船長に任命してこわす」との挨拶に近藤はカン／＼になつて、

「今更違約されるとは何事で御座る！ 申す迄もないことだが、われわれの盟主坂本殿の盡力に因つて櫻島丸を購入し、貴藩の海上裝備が完うしたのだ。その德義を忘れて今更……」

近藤は刀の柄へ手を掛けんばかりに憤慨した。すつたもんだのところへ折よく馬關へ龍馬が

來たので、聞多は龍馬に調停を依頼したから、腹の中では近藤同様癪に觸つてゐたが蟲を殺して、

「近藤、お主が腹に据え兼ねるのはよくわかるし、俺とて井上の言ひ分は實に怪しからんと思ふのだが、今將に薩長聯合成らんとする時ぢや、茲は一番大事の前の小事として堪へてやらうぢやないか」と近藤を慰撫した。

「あんたがさう迄言はれるものを、俺一人でいきりたつても始まん——しかしまア、あんたの言はれることも尤もぢや、凡ては大事の前の小事ぢや」と近藤の氣持も納まつたので、龍馬は改めて中島四郎と協議して、十二月二十四日、重ねて左の約束を取交はした。

一、旗號は薩州侯御章拜借の事。

一、毎日の事務當番士官管轄勿論に候へ共賞罰其外廉事件は總管へ御相談之事。

一、薩州より御乗組士官の月俸只今之通に相定候事。

一、水夫火焚等薩州に於いて被相定候通有之候得共此以後働きに應じ差引可致候事。
 一、商用之儀越荷方より一人乗組、取捌之義に付、船中一統關係不致候得共積荷出入之義は當座士官へ相談之事。

一、尙船の儀は海軍局規外たりと雖大略海軍學校の定則に従ひ度候事。

一、碇泊中、其外一統月俵之外不條理の失費一切存不申候事。

一、船中一切之失費は會計方引請之事。

一、當藩商用閑暇の節は薩州侯運漕物相辨可申候得共其節之失費薩州より可被差出候事。

丑十二月

坂本龍馬

中島四郎

多賀松太郎様

菅野覺兵衛様

寺内信左衛門様

早川二郎様

白峰駿馬様

前河内愛之助様

かうして櫻島丸は、兎も角も一旦『社中』に依託し、専用に供する事になつた。

龍馬等は『社中』を組織した當時『社中盟約書』起草し各自血判して――

凡そ事大小となく社中に相談して之を行ふ可し。若し一己の利のために此の盟約に背く者あらば割腹して其罪を謝す可し。

と記した。

近藤昶はユニオン號購入の事に關して、長州藩主から激賞され、その褒美として、藩費で以てイギリスに留學せしめられる内約を得てゐたが、何故かこの事を秘しがくしにかくしてゐて突然慶應二年正月十五日、イギリス船が馬關を出帆するに際し、祕密に乗込む手筈にして準備してあつたのが、其前夜露見したから『社中』同人大いに憤慨して、小會根の別邸に近藤を呼

び寄せて前後左右から詰問した。

「吾々社中の盟約にたつて背くとあれば、貴様にも覺悟はある筈だ！」

「凡そ事の大小を問はず社中に相談して之を行ふべしとは血判して決めたことだぞ、貴様がイギリスへ行きたいとあらば必ずしも賛成せんやうな尻の穴の小さい吾々ではないぞ。寧ろ坂本先生の日頃の御主張實踐の好機でもあるから大いに賛成して貴様の行を祝つてやりたい位なのだ。それを何ぞや孤鼠々々と抜けがけして行かうとは何事だ！」

「一己の爲めに盟約に背く者は割腹して其罪を謝すべきだ！」

血氣盛んな同志にぐるりつと取巻かれて其責任を問はれては、近藤も今更辯解の辭に窮し、遂に自刃して相果てた。惜しや二十九歳の好青年であつた。

古來武士は名を惜しむと謂はれてゐる。其の名を惜しむためには敢て死を辭さない。是れは日本武士道の掟とも謂ふべきで、近代歐米の自由主義的な觀念では到底割り切れぬ不可解な事であるかも知れないが、日本人にはこの浸し難い信念があればこそ世界の如何なる民族にも

負けない強さがあるのである。割腹を野蠻だなどとほざく腰抜け毛唐に、今日、日一日と日本の強さが證明されて行く事實を、現代の青年は深く考へてみる必要がある。昔は武士のみの掟であつたが、今日は國民一般の掟でなければならぬ——腹を切る術は知らないでも、少くともその覺悟は持つてゐなければならぬ。といふことは無闇に腹を切れといふのではなく、腹はいつでも切つて見せてやる、これだけ日本人の信念は強いぞといふのである。海援隊の盟約文中にあるやうに『一己の爲めに』戮るやうなことは日本武士道の禁令であるのだ。腹は大君の爲めにこそ切るべきである。

文久二年五月、長州藩は曩きの日の西郷隆盛等との約束に随つて、玄米數百俵を櫻島丸に積み込んで、新たに購ひ入れた『社中』の専用船ワイル・ウエフ號と共に舳艫相啣んで鹿兒島へ回航せしめた。

ところが五月二日の未明に五島鹽屋岬沖で大颶風に遭つたのだ。兩船は別れ／＼になつて了つて、櫻島丸だけ猛り立つ風浪を乗切つて辛うじて鹿兒島に着したが、ワイル・ウエフ號は鹽

屋岬沖で顛覆して、船長黒木小太郎、士官池内藏太、浦田運次郎以下船諸共沈んだが、辛うじて士官浦田と水夫二名だけが五島に上陸したばかりで、他は皆海底の藻屑となつて了つた。

大體長藩が今度櫻島丸を鹿兒島に遣はしたに就ては次のやうな内輪の事情もあつたからである。といふのは、海援隊の同志が、

「近藤礼（即ち上杉宋一郎）が自刃したのは、櫻島丸事件で薩藩に申譯相立たぬ仕義によつて一死を遂げたのだ」と、近藤への友情で彼がイギリス船で密航しようとした事實を秘して、櫻島丸事件——長藩が規約を破つて櫻島丸を乙丑丸と改稱し、海援隊社中の専用にする事を拒んだ——それがたとへ、時的の行きがかりであつたにせよ、そのことが問題になつて紛糾したものであつたから、その衝に當つた近藤として、面目をつぶされた自分たちの海援隊は、ともかく薩摩藩へ對して信義を傷付けた。その申譯に割腹したと言ひふらしてやるのが、せめて友情甲斐に彼を犬死させないことにもなるので、この櫻島丸事件を表面に立て、彼の死を飾つてやつたのである。

まつたくこの櫻島丸事件といふものは、慶應二年二月、薩摩藩の村田新八、川村與十郎兩名が、西郷隆盛等の旨を受けて京師から長州に薩長聯合に就ての使者に立つて來た時も問題になつた位で、それが村田、川村兩名の斡旋もあつて、『社中』の面目を立てる事が出來たといふ譯もある。その時、左の書面を川村、村田連名で海援隊に送つてゐる——。

先日粗御咄申上置候乙丑丸御船弊國へ此節廻船之儀山口にて及御談候處御方御一列にて廻船彌以聞濟被下、別て仕合之至に御座候、就ては馬關へ差卸し相成候俵米の儀も其積込方御取計ひ被下候筈に御座候に付左様御心得被下度……（下略）……以上

二月二十四日

村田新八

川村與十郎

小谷耕造様

菅野覺兵衛様

要
用

坂本龍馬

かういふ縁故から今度長州藩が櫻島丸を鹿兒島に遣はしたものであつたのだ。同航したワイル・ウエフ號は、鹿兒島で命名式を舉行する爲め、櫻島丸と並んで行つたが、遂に遭難したので、龍馬の骨折も水泡に歸したわけであつた。

勿論薩長聯合に重大な條件となつた長藩の糧米を薩藩へ輸送することも、大きな目的ではあつたのだが、乙丑丸即ち櫻島丸を鹿兒島へ廻航さすといふこと即ち長藩が薩藩へ對して見せる信用狀としての役割が第一義であつたといふ政治上の微妙な關係があつたのである。

妻龍子月琴を稽古す

ところが折角長州藩から廻送して來た數百俵の糧米を受取ることを、西郷吉之助等が辭退する事に決定して、長州に送還する事になつたが、長州側の誤解を受けてはとの心配から、恰度鹿兒島に滞在中の龍馬に、その使者になつてくれるやう西郷等から頼み込んだ。

間に立つた龍馬は、凡ては薩長聯合のくさびになれかしと取り計らつたことなので弱つたことになつたと思つたが、西郷等に折り入つて頼まれてみれば、そんな使ひはいやだとも言へず六月四日櫻島丸に搭乗して鹿兒島を解纜した。——その船には妻の龍子（鞠子）も同乗してゐた。

龍馬は又々姉乙女への家信に、

：：夫より六月四日より櫻島と云ふ蒸氣船にて長州へ使を頼まれ出船す、此時妻は長崎へ月琴稽古に行きたいとて同船したり、夫より長崎のしるべの所に頼みて私は長州に行けばはからず別紙の通り軍をたのまれ……と書いてゐる。

龍馬は長崎に着くと直ちに「ワイル・ウエフ」號難破の後始末をして、遭難溺死者のために鹽屋崎海濱に場所を選んで、船長黒木等以下の死者の姓名を彫つて「溺死者合靈之墓」と題した石碑を建立した。そして弔慰の法要を營んでから長崎に歸り、妻龍子を此地に留め置いて、

同十四日自身だけ再び櫻島丸に搭乘して馬關に赴き、桂小五郎（この時は木戸孝允と改名してゐた）に面會して、西郷吉之助からの傳言として、何れ改めて書面なり使者を以て御挨拶致すからとのことであるが、ともかく拙者が依頼された糶米は送還して來た旨を告げてから、桂に「拙者の考へを率直に申せば、之を贈るも義であるが、辭するの亦義であると存じ申す。併し貴重な穀類を船中に積みつばなしに致し置いて腐らせて了ふも誠に無益と存ずる故、これはいつそ拙者が頂戴致して、國家に盡すの資と致したいが如何で御座らう？」と心臓強く申出た。木戸孝允は半ば感心して哄笑し乍ら、

「よろしう御座る、進呈申さう」と承諾したので、この糶米全部を海援隊に寄附して貰つた。

龍馬も流石に自分の蟲のよさに我乍ら苦笑して、

「他人の禪で角力を取ると云ふのは、蓋しこんなものかな」と言つた。

かくて、すつたもんだの末、櫻島丸は名を乙丑丸と改めて完全に長藩の所有に歸することゝなつた。

龍馬高杉晋作に應援して海戦す

龍馬の姉への手紙にあるやうに、長州から軍をたのまれたといふのは、幕府と長州の戦端が開始されて、幕府の海軍が大舉して小倉の近海に出没した時だからである。

再度の長州征伐の最初の砲弾は、慶應二年六月七日幕府の軍艦から發せられたのだつた。高杉晋作が六月十四日、長崎で「オテント」號を購ひ入れて來たので、長州藩では之に丙寅丸と命名して幕府軍に對抗せしめた。六月七日、幕兵は伊豫藩の兵と合體して周防の大島郡に上陸する一方、幕艦は室津濱及び上の關燈臺附近を砲撃し、更に大島郡安下莊及び久賀港を砲撃して來た。

さうなつてみると長州兵は抗戦することが出來ずに遠崎に退却した。かくと聞いた高杉晋作は急ぎ丙寅丸に搭乘して十二日夜海峡を突破して、久賀港外に碇泊してゐた幕艦四隻をめちや

くちやに砲撃して三田尻に引揚げて来た。その勢ひに乗じて長州の奇兵隊も遠賀から海峡を渡つて幕兵を追撃したものの、固より實力があつたのではなかつたから、一時的に奇襲の功を奏したといふ迄であつた。

其の間に、幕軍は肅々として長門や周防の四方に迫つて来た。幕府の軍監小笠原豊岐守長行は、手兵數千を率ゐて小倉に到着すると、日限を切つて幕艦を集中し、將に馬關を一斉攻撃しようとする形勢になつて来た。

海軍の方は景氣がよかつたが、幕府の陸戦隊の方は藝州口で勝目がなくなり、石川口に於て敗れ、豊前に於ても敗走するの憂目を見た。

そこで陸戦の不利を知つた幕軍は、富士、鳳翔、迅動の諸艦を小倉近海に出沒させて逆襲の機を狙つてゐた。

恰もよし、坂本龍馬が櫻島丸に搭乗して来たので、高杉晋作は彼に謀つて援助を乞ふたので龍馬は快諾した。そこで早速菅野覺兵衛に命じて準備をさせた。

六月十七日朝霧が濃く島全體を包んで了つて一尺先も分らない——そこで龍馬は奇計を案出して幕府の艦隊を脅かしてやらうと考へ、乙丑丸と丙寅丸に大砲を乗せて、そつと敵の艦隊に接近して撃ちまくつた——四面晦冥、轟々たる砲聲は反響に反響を呼んでゐるんだが、何處から發砲してゐるのか分らないので、それを突きとめることが出来ないで、幕艦はめんくらつて逃げ迷つた。

長藩の一隊は引島、弟子松の砲臺に根據地を置いて、大里を砲撃したり、兵を門司に伏せておいて其背後を襲つた。——小倉の敵兵は防禦が出来ず、止むなく退却して城壁を築いたりして死もの狂ひで防戦した。それに呼應して幕艦も掩護射撃をして味方の軍勢を援けた。

龍馬は、遙かに之を觀望し乍ら長藩の三艦を指揮して大いに奮戦した。「相廻り相闘ひ、砲突砲撃に兩軍相去らず、砲聲殷々轟々岸に響き、砲煙濛々天を蔽ふた」と記録にある。壯烈、猛烈だつた奮戦も漸く夜に入つて熄んだ。

更に翌日は、乙丑丸は丙寅丸と共に他の汽船や帆船を率ひて、田の浦及門司の沿岸を砲撃し

た。敵小倉藩の隊將島村志津磨が手兵を以て田の浦に防戦すると、長州の奇兵隊は吶喊上陸して小倉兵を蹴散らした。

門司の守將澁田見新は長州の軍艦を砲撃しつゝ兵を伏せ、長兵の上陸を要撃しようとしたが時既に長兵は田の浦に上陸して了つた後だったので、退却して島村軍に合流した。

此日、坂本龍馬、阿彌陀等は、民家の屋根の上に登つて對岸の戦況を觀望すると、敵の砲臺は撃破せられてゐて、田の浦沿岸には大小の船舶三百餘艘が焼け乍ら紅焰がめら／＼と天に漲り、海波に映じて頗る壯觀を極めてゐるので思はず萬歳を叫んだ。

龍馬は更に大里を砲撃、勢ひに乗じて小倉兵を敗走せしめ、長驅して新町に入り民家に火を放つた。阿鼻叫喚である。

一方、盛りかへして來た肥後・小倉の敵兵は、赤坂八町阪に激戦すれば、幕艦は發砲して之を掩護した。長州勢もこれにはたち／＼となり、死もの狂ひで闘ふ。肥後勢も亦よく防いで勝敗はなか／＼決しない。長州勢の危地に陥ると見るや其の隙に乗じて幕府の一艦は赤間ヶ關を

衝いて來た。何茨つとばかり坂本龍馬は撃ちまくつて之を敗走させて了つた。

陸戦隊の鬪將高杉晋作は、孤冠りの酒樽の鏡を抜いて士卒を激勵まし、吶喊、叫喚——遂に敵陣を破つて其旗を奪つて了つた。

高杉晋作は進駐して小倉を攻めた。肥後兵は街路の大樹を伐り倒して路を塞ぐ、長州勢爲めに進み通ることが出来ない。幕府の軍監小笠原長行は、味方が大樹を濫伐した事を詰問したので、肥後兵は怒りに猛り立ち、

「馬鹿な事も休み／＼言へ！ 諸藩の奴等が袖手傍觀してゐて戦はぬから、吾等獨り敢然として立ち向つてゐるのだ。樹を伐つて之に據つて敵を防ぐのは戦略だ。それを何だ、抗議するとは……」と小笠原の見當違ひを憤慨した。各藩でも小笠原の間拔けさ加減に呆れ、それが原因で戦機を失したことを憤慨して馬鹿々々しくなり、敢て防戦するのを止めて了つた。

肥後兵も不快の念止み難く、俄かに撤兵して退去して了つた。柳川、久留米其他の諸隊も肥後兵に引きつゞいて御免蒙つて了つたので、小笠原は呆然自失、孤鼠々々と残兵をまとあて富

士丸に搭乘して長崎に退却して了つた。——哀れをとどめたのは小倉勢で、茲に全く孤立無援になつたから、自ら城に火を放つて香春へ退却した。——火光焰々天海爲に紅となるの慘狀であつた。

此の戦争は、規模は大したものではなかつたとしても、我が海軍文明の武器を利用して勝敗を實地に試みたといふ點では劃期的なもので、我が海戦史上特筆されるべきものであらう。

龍馬の戦況報告

龍馬は戦争の状況を家兄の権平に知らせた書信に次のやうに記されてゐる。

- 一、六月頃蒸氣（櫻島丸）を以て薩州より長州へ使者に至る時、頼まれて無據長州の軍隊を率ひて戦争せしに是は何事もなく面白き事にありし。
- 一、惣て咄しは實とは相違すれども軍は別て然るもの也、之を筆にし差上げて實となさず

やも知れず、一度やつて見たる人なれば咄しが出る。

- 一、左は龍馬が畫きたる戦圖也。



二、七月以後戦ひ止む時なかりしが、とふく十月四日となり長州より攻め取りし土地は小倉に渡し、以後長州に敵す可らざるを盟ひ、夫れより地面を改めしに、六萬石許ありしなり。大戦争中一度大戦がありしに長州方五十人許討死致した時、軍にて味方五十人も死ぬと申時は敵味方合せおびただしき死人也、先手しばく破れしより高杉晋作東陣より錦の手のぼりにて下知し、薩州の使者村田新八と色々咄しいたしなどし、へたく笑ながら氣を附てゐる、敵は肥後の兵計にて強かりしければ晋作下知して酒樽をかきいだして戰場にて是を開かせなどして、しきりに戦はせ、とふく敵を打破り肥後の陣幕旗印など不殘分取いたしたり。私共兼(豫)ねて戰場と申せば人夥多しく死するものと思ひしに、人の十人と死するほどの戦なれば餘ほど強き軍が出来ることに候。

一、槍にて久しく戦ふ時は必ず其所に十人かしこに二十人或は三四十人許各々人の陰に集り候、是は戦になれぬ者にて、斯様になり候方はいつも死人多くなり、まけ申ものにて候。強きものは斯様にはなさぬにて候、先年英人長州にて戦ひしに船より上陸するとばらく

と開き四間に一人宛許りに立並び候。

一、當時天下の人物と云へば、

徳川家にては、大久保一翁、勝安房守。

越前にては、光岡八郎、長谷長勘左衛門。

肥後にては、横井平四郎。

薩摩にては、小松帶刀、西郷隆盛。

長州にては、桂小五郎、高杉晋作。

一、私只今志延びて西洋船を取入れたり又は打破りたり致し候、元より諸國より同志を集め水夫を集め候へ共仕合には薩州にては小松帶刀、西郷吉之助などが如何程やるかやりて見給へなど申くれ候。甚だ當時は面白き事にて候、どふぞく昔の鼻たれと御笑ひ被下間敷く候。

將軍家茂の死

幕軍振はず士氣沮喪の折柄、將軍家茂は、長州征伐の半ばに大阪城中にて七月二十日薨去した。

一橋慶喜、遺命を奉じて長征の軍を指揮しようとして、家茂の死を秘してゐたが、隠すより現はるゝはなしの格言の如く、此事早くも戦地に知れ亘つたので、幕府は愈々振はなくなつて了つた。

龍馬はこの時長崎に在つたが、八月十六日附にて、長府の三吉慎藏に宛てゝ次の書面を送つた。

其後は益々御勇壯奉恐賀候、然らば去る七月二十七日及八月朔日小倉合戦、終に落城と承り候、扱、御内談承り候事の如く御妙策被行候事と奉存候、幕海軍が道を取切候事

は無之（是もとても道は切取はすまいが御用心可成など承候事なり）其事を承り候ては早々下の關へ出かけ候も、（もう敵が無ければ）何かと力なく奉存候、將軍も彌死去仕り、後は一橋又紀州が後目望み候へ共一同一條の論なき候よし、何れにしても幕中大破に相成候よし、又兼（豫）而高名なる幕府人物勝安房守（元麟太郎こと）も又京に出、是非長州伐は止めにくく論致し、會津あたりと大論日々候よしなれども、何共片付不申、幕は此頃英國のたすけを受候事は毛頭出来不申事に相成候、これは小松帶刀が見つものよし、兼而佛蘭西の「ミニストル」は幕府の周旋計致せしなれども、此頃より薩より日本の情實を佛蘭西の方へ申遣し彼佛國に薩生兩人周旋仕候に付て江戸に来れる佛の「ミニストル」は近日國に歸り候よし（是は西郷の咄なり）此頃薩は兵を動しながら戦を未だせざるは大に故あり、先づ歎すべからず、幕のたをれ候は近にあるべく奉存候……（下略）

長州征伐の擧は、將軍薨去を機として停止の朝命が下つた。

一橋慶喜は騎虎の勢ひで一たび廣島に出馬しようとしたのであるが、頼みにしてゐた海軍は敗れ、小倉陥落し、小笠原は、長崎に敗走して了つたといふだらしなさに、慶喜はがっかりして、遂に参内の上、征長中止、諸侯會議の議を奏聞に及んだ。

幕府では勝海舟を長崎に遣はし長州人に解兵の儀を諭さしめた。八月二十日初めて將軍の喪(死去)を名として暫く征長の戦を停め、又幕府は、藝州藩主に命じて後事を處分せしめた。朝廷に於かせられては、更に將軍家相續の儀を慶喜に命じ給ひ、慶喜は之を御請けしたのである。

實に王政復古派が長藩の社稷(米倉即ち藩の財政の事)の興敗を賭けて争つた戦ひは幸にも連戦連勝だつた。その反對に幕府の威令は地に墜ち新局面を展開したのである。

高杉晋作の脱藩

この幕府と長州藩との戦争では高杉晋作が主役として働いてゐるのだから、少し彼の爲人や逸話を田中光顯伯の書かれた「維新夜話」の中から拾つてみよう。

當時筑前の野村望東尼の許に亡命中であつた高杉晋作は、故國の急を聞いて、孤憤措くあたはず、單身海峡を渡つて馬關に乗り込んだ。

これより先、高杉は、次ぎ／＼と主戦勤王派の有志が殺され、恭順派の壯士達に井上聞多が要撃されて、九死一生の負傷を受けるに至るや、愈々脱藩と臍を決めて、聞多を見舞かたく訣別に行つた。

途中山路へかゝつてふと見ると、向うから来る三人ばかりの武士、いづれも恭順派の連中である。殊に中の一人は日頃から力自慢の某である。見るや高杉、手拭をとり出して頬かむりをし、刀の柄に香油の壺をぶらさげて、鼻唄をうたひながら通り過ぎた。そしてまんまと油壺をまいてしまつた。勿論將軍家茂をも「いよう、大將軍！」と叱咤する程の傑物高杉である。何ぞ三人の油壺共を恐れんやである。が今は大事の場合である。たとへ一時は恭順派が勢力を

得たにしたところで、防長二國の運命は一に彼の双肩にかゝつてゐると言つても過言ではない。さうした貴重な身をむざ／＼危険に晒すの愚を、よく知つてゐたのである、そればかりではない、自己の安泰ばかり念つてゐる泰順派では、井上にしろ高杉にしろ正義派の連中のあることは目の上の瘤である。そこでたへず刺客をはなつて暗殺すべくつけねらつてゐたのである。

高杉はうまく通りぬけると、山口の宿所に養生してゐる聞多を訪ふた。聞多は餘程の深手と見へて、僅かの間にげつそりとなつてしまつてゐた。が、とに角外科醫のお蔭で一命だけはとりとめるらしい。高杉は言つた、

「僕はこれから筑前の方へ脱走しようと思ふ。かう形勢が變つて來ては我家の前途が思ひやられる。吾々は今大事な騙だ。外國軍艦に和睦を申し入れたのも、征長軍を迎へて思ふさまやつつけるつもりであつたが、こんな破目になつてはそれも一時中止する外はない。今の儘で立つたのでは征長軍どころか後の敵が危険い、かねて話して置いたとほり若しと言ふことがあつたら、君公父子を朝鮮か支那の山奥へ御案内してでも御命を完うさせねばならぬ。が、今はそれ

すら計つてゐられぬ有様だ。よつて僕は一先づ脱走する。貴公も十分養生して時機の來るのを待ち給へ」

高杉は慨嘆にたへぬ面持で言ふ。と聞多も、

「いや何、今に又僕等の活動する機會がめぐつて來る。しかし今は國にゐては危険い。僕も少し動けるやうになつたら何れへか脱走する。貴公も御身御大切に、お互に大事な身體ぢやから喃」と言ふ。高杉は、

「心得て居る。では」と言つて外に出た。

高杉はそれから三田尻に行き、更に徳地に赴いて奇兵隊の軍監山縣狂介（有朋）、三條卿の御用掛をして居た野村靖之助等に會ひ脱走する由をつげた。と、山縣はそれを止めた、今高杉に行かれたのではどうにもならぬのである。が高杉は、

「いや、それもわかつて居る。が、今日の時勢では國內に居つてもどうにもならぬ。當路の役人が取るに足らぬ者ばかりで、正義派は盡く御覽の通りである。此の上は、外にあつて藩論の

回復を計る外はない、よつて僕は外にあつて努力しながら時機を待つつもりである。どうか貴公等は内にあつてその準備をして貰ひたい。そして愈々時機が來たら内外相呼應して此の大業を完成せねばならぬ」

高杉の氣持は山縣にもすぐわかつた。それでくれぐれも氣をつけて行かれるやうにと言つて見送つた。高杉が、

ともしびのかけ細く見ゆ今宵かな

と言ふ一句を側にあつた行燈に書いたのは實にその時であつた。

十一月朔日高杉は馬關の義商白石正一郎の家に入り、そこで筑前の同志中村圓太、正一郎の弟大庭傳七と會合、二日に筑前に渡る。

筑前では中村圓太の紹介で福岡藩の月形洗藏、對州藩の家老平田大江などに會つた。高杉の考へではかうして諸國の同志を集め、それをひきつれて長州へ戻り、一舉にして俗論黨の本城萩を衝かうと思つたのである。が、對州藩でも俗論黨が時を得顔に跋扈する。平田大江などは

手も足も出ない有様である。

高杉は此の上は鍋島閑叟を動かして、九州聯結を起さうとした。が、これもうまく實現しない。利巧な閑叟は時勢の動きを見てゐる、つまりどつちつかずである。

そんなことで又高杉の身も危険になつて來た。それで月形洗藏等の世話で博多に戻り、野村東圃と言ふ畫工の許に一時身を寄せた。が、それでも充分でない。そこで福岡から一里ばかり離れた平尾山の野村望東尼の許に一時身をひそめることになつた。

野村望東尼の贈り物

望東尼はその頃六十歳近くで、女ながら勤王の志厚く、平野國臣・眞木和泉・月形洗藏・北條右門・工藤左門などと言ふ人物とも深く交り何くれとなく志士達の世話をしてゐた、従つて望東尼の草庵がいつとなしに諸國志士の懇談の場所となり、又亡命の隠れ家ともなつた。

高杉は名を谷潜藏と變へて草庵に入る。間もなく一緒に來た中村圓太が商人姿に身をかへてやつて來た。中村も脱藩者なので自國をうろくしてゐると危険なのである。中村は、「先づ對州領に行きそれから長州へ入るが、言附でもあらば……」と言つた。

高杉は、

「貴公が長州に入られたら先づ國內の様子を逸早く知らせて欲しい。貴公と言ひ僕と言ひ、妙な形でそれぞれ自國を出て、僕は筑前、貴公は長州に入るやうな事になつてゐるが、これも何かの御縁でムる。もうこれからいよいよ冬にもなれば随分と御身に氣をつけられるやう。それから長藩の同志の者にお逢ひの節は、僕が谷梅之進と改名したとお傳へ下されい。谷の梅は雪や氷に閉ざされてはゐるが、いづれは一陽來福の春を迎へるつもりでムる。幕府や俗論黨に壓迫されて五尺の身體置き處なく、かうしてはゐれど花咲く春の準備は常にして居る、」
心おきなく語り合つた中村はやがて出發する。丁度その頃である、野村望東尼が、「谷梅といふ人世をはぐかりてなりといふに」と枕書して、

冬深き雪のうちなる梅の花

埋れながらも香やは隠るゝ

と。又「長門の國の君、なき罪に陥いらせける頃臣達の悲しみを聞きて傳手に聞えける」と枕書して、

暗き世に今はあふ野の松原も

あすは野原とあけずやあるべき

と言ふ歌を贈つたのは。それに對して高杉は詩を作つて答へた。

高杉の身邊を世話するために月形洗藏等のきもいりで、福岡藩の國學者吉村千秋の一女清子といふのが手傳ひに來てゐた。清子は年は僅かに十四歳、容姿端麗、見るからに淑やかな少女であつた。何かの話の末に高杉は少女に歌を所望した。と、少女はすぐ筆をとつてすらく書いた。

我もまたおなじみくにゝ生れきて

大和心を知らざらめやは

十四歳の少女が卽座にこれを書いたのである。高杉は幾度か高聲に誦みかへした後、絶讃した。そして唐紙半折に七言絶句を書いて少女に與へた。望東尼の草庵はかうして一少女に到るまで庵主の薫陶がにじみ出てゐた。

かうして高杉が望東尼の草庵に時を過してゐるうちに、長藩の情勢はガラリと一變した。長州へ入つて行つた中村圓太・早川勇等も餘りの變りかたに驚愕した。そして直ぐ草庵へあてて早飛脚を立てた。

長藩では俗論黨の役人共は蛤御門の責任者の斷罪ばかりでなく、正義派の凡てを屠り、はては勤王諸隊の解散まで敢てなし盡く幕府の要求を容れようとしてゐるのである。さうして正義を標榜する諸隊はもはや萩にも山口にも止ることを不許、長府に集つて功山寺に在す三條卿等を守護してゐる旨が手紙には詳細書かれてあるのである。

読み終つた音作は決然として、

「永く御厄介に相成つたが主家の危機が迫つてゐる。主家の滅亡を外にして、他國に身を潜めてゐることが出来申さうか。拙者これより國計へ立歸り、異端者共を片つ端から撫で切りに致す」と、聲もあらはに言ひはなす。と望東尼は引き止めようともせず、うなづきながら、「さうでござるとも、早々御歸國あつて、天朝の御爲に働きなされ、そんなこともあらうかと、衣類を用意して置きました」と言ひながら、羽織・袴・袴・袴などを取出して高杉の前に置く。高杉、望東尼の温い心根に感謝しながら押いただき着ようとして見ると二枚の短冊が出た。それには、

まごころを筑紫のきぬは國の爲

立歸るべき衣手にせよ

今一首は、

山口の花ちりぬとも谷の梅の

開く春邊を堪へて待たなむ

とあつた。高杉感涙にむせび乍ら、離別の一絶を賦して之に酬ふ。
「忝けなく頂戴いたす。御縁あらば又重ねて」

と挨拶もそこへ出發した。それは十一月二十一日のことであつた。

自愧知君容我狂 山莊留我更多情

浮沈十年杞憂志 不若閑雲野鶴清

後年、野村望東尼は後正五位を贈られたのである。

高杉晋作の處世訓

最初私（田中光顯伯）が高杉に會うたのは文久三年の春、國許から京都へ出た時であつた。高杉は當時頭髪を剃つてゐてクリ／＼坊主になつて法衣のやうなものをまとひ、短劍一本佩して、まるで僧形のやうな風體であつた。

何でも場所は東山の或る料亭で高杉は首に頭陀袋をかけてゐた。

藝妓が寄つてたかつて物珍らしさうに此の新發意をからかひはじめた。すると高杉は坊主頭を叩いて諭ひだした。

坊主頭を叩いて見れば

安い西瓜の音がする

満座笑ひくづれてしまつたが、その飄逸な態度は今も尙眼底にあり／＼と残つてゐる。

高杉の生涯は極めて短かつた。慶應三年四月十四日、下關櫻山招魂場の麓の閑居で病死した時が僅かに二十九歳であつた。しかしながら彼の此の短い一生は其の殆んどが座の暖まる暇なき一生であつた。僅かに獄中にゐた八十餘日だけが辛うじて彼の最大の落ついた時間かも知れなかつた。が、彼の如きは奇策縦横、神出鬼没、其の一舉手一投足が凡て天下の魁となつて藩の意氣を鼓舞したのみならず全國勤王運動家の指導者の役を務めてゐる。

長州に滞在中高杉は私に教へて言つた。

「死すべき時に死し、生くべき時に生くるは英雄豪傑のなすところである。兩三年は輕學妄動せずして専ら學問をするがよい。その中には英雄の死すべき時が必ずくる」
高杉は又言った。

「凡そ英雄といふものは變なき時は非人乞食となつて潜れ、變ある時に及んで龍の如くに振舞はねばならぬ」

更に、高杉は、

「男子と言ふものは困つたと言ふことを決していふものではない。これは自分が父から平生やかましくいはれたことであるが困つたと言ふ時は死ぬ時である。どんな難局に處しても、何困らぬと言ふ氣概でやつておると自づと通づるものである。(中略)どんな難局にも必ず逃れ路がある。行き當れば曲り路ありと言ふ譯である。斷じて困らぬと言ふ氣持でやつて居れば必ず道はつくものである。だから困つたと言ふ一言だけは決して口にははいけない」と堅くいましめた。此の一言今もなほ私の耳底にはつきりと残つて居る。(九十四翁田中光顯著「維新夜

話」より)

高杉晋作の死と望東尼

高杉晋作は吉田松陰の高弟で久坂玄瑞と並び稱された逸足だつた。高杉は慶應二年暮、馬關に引退して櫻山麓に病室を設け、俠妓おうめ及び望東尼の篤い看護を受けた。病は潜伏してゐた肺疾が激發したのだつた。

高杉病床に在つて 孝明天皇崩御の悲報(慶應二年十二月二十五日)——休戦後の和議(同三年正月二十二日)を聞き、西郷隆盛が討幕の大計畫を抱いて雄藩聯合を策せんと土州に向つた慶應三年二月中旬頃から病革り、遂に四月十四日、愛妾おうめ、女傑野村望東尼、郷里から馳けつけた兩親、夫人まさ子などを枕頭に殘して幾春秋を亂世に見殘して二十九歳を一期として逝去した。

死す數日前料紙に筆執つて――

面白き事も無き世におもしろく

と書いて望東尼に示すと、望東尼は之に、

住みなすものは心なりけり

と下句を附けた。是れが高杉の辭世となつたのであつた。

望東尼に就て附け加へ度いことがある。「維新夜話」から少し拜借しよう。――

福岡藩では勤王派の志士月形洗藏・江上榮之進等十一人を斬に處し、家老加藤司書等六人を屠腹に處した。その際高杉亡命中の恩人野村望東尼外二十餘人も罪せられた。望東尼は殊に女性の身であつたので藩でも斬には處せず、絶海の孤島姫島へ島流しと言ふことに決定した。その時望東尼は、

浮雲のかゝるもよしや武夫の

日本心の數に入りなば

と言ふ一首を平尾山莊の壁にとどめて網乗物に乗せられ送り出された。望東尼はもろみ川を渡る時又左の一首をよんだ。

冬の夜の月ともろみの河橋を

渡りかへらん夜半もあれかし

いざ姫島に着くと島長は、小高き丘の上に立てられた松の荒格子の飲められてある牢屋へ、六十路に餘る老女を荒々しくも投げ込んだ。牢屋の中はまつ暗である。その時望東尼は、

住みそむる囚屋の闇に灯火も

浪の音いかに聞きあかさまし

と詠んだ。また近くに漁師の家が僅かばかり見えるのを見て囚屋の柱に、

またこゝに住みなん人よたへ難く

うしと思ふはわづかばかりぞ

と書き記した。更に又牢屋の中から山際の水を汲みとる時、

袖そよぐ水にもちりの浮世ぞと

さしも數ふる朝日かげかな

と言ふ感慨を洩した。そして暇ごとに姫島日記を草するのを樂みとした。さうしてゐるうちにも國々で勤王派の志士達が倒されて行くものひきもきらぬ。それが牢屋の中にある望東尼の耳にも入つて来る。事實望東尼の平尾山莊を訪づれた人々の中、幾人國の御爲に犠牲となつて生命を落した人があつたかは數知れなかつた。

望東尼はそれ等の人々のあとをとむらはんと指先を傷つけて血を絞り、それで般若波羅密多心經を書いて遺族の人達に送つた。その經書の奥には、又、

おくれゐてかくもかひなし法の文

よみがへりこん傳ならなくに

と書き添へた。かうした血書を幾度か書いた或夜、突如闇の中に聲あつて、

「望東殿、望東殿」と呼ばはるものがある。望東尼きつとなつて表の方を誰何すると、

「高杉晋作から頼まれてお迎へに参つた。いざ出られい」と言ふかと思ふと忽ち牢格子を破つて入つて来た、それは九月十六日のことで、迎へに行つたのは對州藩の多田莊藏等であつた。

望東尼は胸がいつぱいになつて倒れんばかりであつた。

望東尼に乗せた船は矢よりも早く走つて三日目の朝馬關に着く、晋作は海邊まで出迎へて望東尼を義商白石正一郎の家にもなつた。まるで夢のやうな思ひである。高杉は一方には三軍を叱咤する將軍の倅がある半面、かうした懇な心根を持つてゐた。しかもこれは四境の戦ひの最中である。

晋作逝いて遺骸は同志の者等が始末して厚狭郡吉田村の清水山に葬り、其處へ東行庵をたてて愛妓おうめが髪をおろして尼となり、梅處尼と改めて香華をたやさなかつた。

此の梅處尼は高杉の死後四十餘年間貞操を守り通した節婦である。

龍馬、商社を創立す

龍馬は征長の軍が中止になつて謂はゞ煩さい事が一段落になつたので、持前の計畫好きを發揮して、かねてから考へてゐた——馬關に一商社を設立して海峡通過の船舶を檢閲する、そして物資の需要供給の状態を精査して市場物價を統制しようとの案を立てたのである。是れは一考へると武士らしからぬ考へのやうであるが、これが龍馬をして今日に至るまで一介の武辯として歴史のあなたに追ひやられず社會經濟學說の重要な一部門として龍馬の商魂が研究され、經濟に裨益してゐる所以なのである。

龍馬は自ら率ゐる海援隊に莫大な費用がかかるのを、何としても賄つて行かなければならぬ。舌三寸や口八丁手八丁でさうく他藩から費用を出させるのも何だか氣が引けるし、武士の體面上そんなことも出来ない。が、金の要することはどんなことをしても要るのだから何とか

しなければ海援隊の維持は覺束ない。海援隊は國家的の仕事といふよりは國防上の必須な設備の擴充である筈なのだが、この亂麻の如き國情では何處に話を持つて行つても、誰れに相談したところで埒の明く筈もない、これはどうしても自分の手で賄つて行くより他に打開の道はない——龍馬は馬關に在つて日夜考へに考へ抜いてこの計畫を實行に移さうと思つた。それで愈々慶應二年十一月、長州藩の五代才助と馬關で會合して左の如く議定した。

- 一、商社盟誓之儀者御五の國名を下賜商家の名號相唱可申候。
- 一、商社中の印鑑は互に取替置可申事。
- 一、商社組合の上は互に出入帖を以て公明の算を顯し損益を半折すべき事。
- 一、荷方船三、四艘相備薩船の名號にして國旗相立置可申候。
- 一、馬關通船之儀は何品を論ぜず上下共に可成差止め譬へ不差通候而不叶船と云へども改不相濟趣を以て可成引上置候儀同商社の緊要なる眼目に候事。
- 一、馬關通船相開候節は日數二十五日前社中へ通信の事。

名目^{めいもく}は一個の商社ではあつても、薩長で暗に之を保護して其目的を貫徹^{くわくごつ}させやうとしたものだけに、運送業者の恐慌^{きやうくわう}一方ならず、一方商社の勢力は日に日に加はつて行つたから仕舞^{しま}には世間の非難^{まじ}の的となつた、薩長で龍馬にこれくらいの恩返しは當り前であると謂^いへやう、龍馬は生家^{うぢ}へのたよりに――

……先頃より段々御手紙^{ごてがし}被^か下^{くだ}候、おゝせこ(仰^{おほ}せ越^こ)され候文に私を以て利をむさぼり天下國家の事をわすれ候との御見付^{ごみつけ}のよふ(様)に存ぜられ候……乍^{あや}不及^{いふたがら}天下に志をのべ候爲とて御國よりは一錢一文のたすけをうけず、諸生^{しよせい}の五十人も養ひ候得者^{えいば}一人に付一年どふしても六十兩位^{ろくじゆらふ}はいり申候ものゆへ利を求め申候、

とある。實にはつきりした計算^{けいさん}で、龍馬が商社を設立した目的が奈邊^{なへん}にあるか、この手紙の文中でも推察^{すいさつ}するに難くない。

後藤象二郎來り盟す

慶應三年丁卯^{ていおう}の春三月、土佐藩參政の後藤象二郎^{ごとうしやうじやう}は藩命を以て汽船買入の爲め長崎に來た。龍馬は噂^{うわさ}にきいてかねてから後藤の才識^{さいしき}絶倫^{ぜつりん}を欽慕^{きんぼ}してゐたので、一夕^{いつせき}松井宗助の紹介によつて面會した。

龍馬は外國人との交渉^{かうせう}に依つて知り得た西洋の事情から、引いては海軍の擴張、航海の必要といふ方へ話をすゝめて行つて、まるでそれらのことに無關心^{むくわんしん}である後藤の狹隘^{けいあい}なる國家主義を苦もなく説破^{せつぱ}した。――龍馬は「世界」を論じ、象次郎は「一國」を語る、共に國を思ふの至情^{しじやう}に變りはなくとも、二人の間にはそれだけの差異^{さがい}があつたのだ。

しかも龍馬は「平等論^{びやうとうろん}」を唱へ、「郡縣論^{ぐんけんろん}」を主張し、「將軍」といふ有名無實^{むじつ}の地位を廢棄しようとする進歩主義者^{しんぽしぎしや}である。西洋の文明を日本に取り入れて日本をして「世界の日本」

たらしめようと目論む開進主義者である。

こんな風にして龍馬と象二郎とは數回相往來してゐた。海援隊士の一人が龍馬に、

「後藤とは一體どんな人物でござす？」と質問した時、龍馬は、

「彼は何といつても傑物だな。彼奴は御國（土藩）の参政だが、佐幕の吉田元吉の甥ぢやから固から僕とは仇敵の間柄みたやうなもんぢやが、そんな一個人のことはこの國難の際に問題ぢやない。二人で話してゐる時もそんな古くさいことには一言も觸れやせん。恩讐共に忘るゝものゝ如しといふ具合ぢやつた。後藤側に言はせれば此方が仇敵ぢやらうよ、ハハハ。それだけでも既に彼奴は非凡だと云へるし、又酒を呑んどつても油断なく議論を自分の方に惹きつけやう、とするあたり才氣絶倫たるもんぢや。一つ後藤を利用して——といつて悪くば引きつけて吾黨の志望を達したいものぢやよ」といつて呵々大笑した。

後藤もまた龍馬が聞きしに優る超凡の傑物だとほめちぎり、其の卓説に感服してからといふものは、彼に一臂の力を添へようと盟約し、龍馬をして土佐に歸藩すべしとしきりに周旋する

ところがあつた。大は大を知るといふところであらう。

龍馬は何かの手紙の中に——

後藤は實に同志にて人のたましひも志も土佐國中で他に比ふべき者はあるまいと存候、其外の人は皆少々づつ人が下り申候。

と書いた位後藤象二郎を信頼するやうになつて行つた。

後藤は龍馬に、

「最近の情勢では、土佐藩も大いに振るひ、近く薩長と駢馳（歩調を共にすること）するやも計られませんで……」と告げた、龍馬は大いに喜んで、近況として長州の桂小五郎に次の如く書いて送つた。

一筆啓上仕候、益御安泰可被成御座候、然先頃ハ罷出段々御世話難有次第、萬謝候、其節溝淵廣之丞ニ御申聞相願候事件を同國の重役後藤庄次（象）郎一々相談候より餘程夜の明け候景色、重役共又窃に小弟（龍馬）にも面會仕候故十分論じ申候、此頃は土佐に一

新の起歩相見へ申候、其事はくハ敷(悉しく)さし出候中島作太郎に申聞候御聞取可被遣候、もとより此一新仕候も誠に先生の御力と奉たてまつり拜候事に御座候、當時にても土佐國ハ幕の役にハ立不申位の所は相はこび申候、今年七、八月にも相成候後ハ事により昔の薩長土と相成可申と相樂ミ居申候、其餘拜顔の期萬々申上べく候、稽首々々。

十四日

龍馬

木奎先生

足下(木戸侯爵家文書中の坂本龍馬關係文書に據る)

海軍は龍馬、陸軍は中岡

龍馬は中岡慎太郎と馬關で會遇して、土州藩の海陸軍の振興策に關して協議した。即ち「海軍」の事は龍馬、「陸軍」の事は中岡、之が振興の事に當ることに決定した。

龍馬は秘書役長岡謙吉に命じて陸海軍振興會として左の規約を創立せしめた。

一、出京官

參政 壹員

監察 壹員

附屬書生貳員或は參員

右書生當時出京兩官の自選を許す。外藩應接の際並に陸援隊中の機密を掌る。

一、陸援隊

隊長 壹人

脱藩の者陸上幹旋の才ある者皆此の隊に入る、國に屬せず暗に出京官に屬す。天下の動靜を觀、諸藩の強弱を察し、内應外援、控制變化、遊說間諜の事を掌る。

一、出崎官

參政 壹員

坂本龍馬

附屬書生

貳員

右書生、當時出崎官の自選を許す。外藩應接の際並に海援隊中の機密を掌る。

一、海援隊

隊長 壹人

汽船、各船之に屬す、脱藩之者海外關拓杯に志ある者此隊に入る、國に屬せず暗に出崎官に屬す、運船射利、應接出沒、海島を拓き、五州の輿情を察する事を掌る。(即ち陸援隊は京都出張中の藩の重役に屬し、海援隊は長崎出張中の藩の重役に屬すると云ふ定めである。)

凡海陸兩隊、所作の錢糧常に之を給せず。其自營自取に任ず。但、臨時官給固より無定額且海陸用を異にすと雖も互に相應援、其所給は多く海より生ず。故に射利は復た官に利せず、兩隊相給するを要す。或は其所轄の局に由りて亦其部分金を收む。則ち兩隊臨時入用に充つべし。右等の處分京崎(出京、出崎)兩官の計議に任ず。(經費は藩から支給を受

けることもあるが定額ではない。各自勝手に自營の道を講じてする代りに、海援隊で儲けた金は藩へ納金せずともよろしいと云ふ甚だ自由な立場にあつたのである。)

海援隊約規

龍馬がまだ右の腹案を實行に移すまでには至つてゐなかつたところ、後藤象二郎と相識るに及んで後藤に海陸兩隊の振興策を謀つた。

後藤象二郎は海援隊に「土佐藩附屬」といふ肩書を假りに附けたばかりか、土佐藩重役たる自身の一存で龍馬の脱藩の罪を免じ、事實に於て「海援隊長」であつたのを改めてはつきりとそれに任命したのである。

龍馬は更に後藤と協議して「海援隊約規」起草し、之を全海援隊中に告示した。

一、凡嘗て本藩ヲ脱スル者、及他藩ヲ脱スル者、海外ノ志アル者、此隊ニ入ル。運輸、射

利、開拓、機密、本藩ノ應援ヲ爲スヲ主トス。今後自他ニ論ナク其志ニ從テ選テ入之。

一、凡隊中ノ事、一切隊長ノ處分ニ任ズ、敢テ或ハ違背スル勿レ。若シ亂暴事ヲ破リ妄謬ノ害ヲ引クニ至テハ隊長其死活ヲ制スルモ亦許ス。

一、凡隊中患難相救ヒ、困扼相護リ義氣相責メ條理相糺シ若クハ獨斷果激儕輩ノ妨ヲ爲シ若クハ儕輩相推シ乘勢強制シ他人ノ妨ヲ爲ス、是尤慎ム可キ所、敢テ或ハ懈ル事勿レ。

一、凡隊中、修業、分課、政法、火技、航機、學語等ノ如キ其志ニ從テ執之、互ニ相勉勵、敢テ或ハ懈ル事勿レ。

一、凡隊中、所費ノ錢糧、其自營ヲ巧ニ取ル、亦互ニ相分配私スル所アル勿レ。若學事用度不足或學科缺乏ヲ致ス、隊長建議出崎官ノ給辨ヲ俟ツ。

即ち海援隊士の資格を定め、目的を述ぶるに當つては鋭敏にして先見の明あることが窺はれるのである。しかも制裁の嚴格なること、團結の強固なること、秩序立つた組織、用意の周到なること等々——海援隊は斯くの如くにして成り、斯くの如くにして組織されたのである。

海援隊は軍艦四隻から成り、隊士は二十八名、乗組水夫等を合計して五十餘名である。
主なる士は——

菅野覺兵衛	山本弘堂	高松太郎	野村辰太郎
澤村總之丞	安岡金馬	陸奥源二郎	大山宗太郎
白峯駿馬	中島作太郎	左柳高次	石田英吉
新宮馬次郎	橋本麒之助	長岡謙吉	岡内俊太郎
山本俊輔	橋本久太夫	三上太郎	腰越次郎
森田晉三	渡邊剛八	小谷耕藏	

等であつた。中で澤村總之丞は英法に通じてゐるといふので、「外人應接係」に長岡謙吉は文章を能くするので隊長龍馬の秘書となつた。

伊呂波丸沈没事件

慶應三年四月十九日、龍馬は同志數名と共に、銃砲彈藥等を持船伊呂波丸（船長國島六左衛門、士官小谷耕藏、渡邊剛八——龍馬が宇和島藩に購せしめた汽船）に満載して、長崎を發航し大阪に廻航しようとした。

海上備後鞆の津を過ぎた時が二十三日午後十一時頃であつた。「雨蕭々、濃霧海を蔽ひ、咫尺を辨ぜず」と記録にある。偶々其時、大汽船が東方から航行して來て伊呂波丸に衝突した。——左舷を毀され、機關室を損じた。海水が浸入して甲板をひたし、船は正に沈没しようとした。水夫や掛取等は驚駭狼狽爲す處を知らずといふ有様なので、龍馬は大音聲に叫んで「我れに従へ」とばかり身を躍らして向うの汽船に飛込むと、つゞいて皆々も飛び込むや否や伊呂波丸は一瞬の間に沈没して了つた。

龍馬は甲板を踏み鳴らして先方の士官を呼び立てたが出て來ない。龍馬は怒髪天を衝き船長に迫つて衝突の顛末を談判しようとする、船長はしよんぼりして只ベコ〜と謝罪し乍ら、「この船は紀州藩の持船明光丸で、長州まで航行いたさうと此處まで参つたもので御座るが、何分當藩のお係り役人衆は長州にゐられますが、談判の事一さいは長崎でなくては埒が明き申さぬ、何卒長崎までお越し願ひ度い仕儀で御座る」と言ふので止むなく龍馬等は一旦鞆の津に上陸した。血氣にはやる左柳高次、腰越次郎の兩士は海援隊を走らせて明光丸に乗込み、船員を襲殺にしようとしたのを龍馬は押しとどめ慰撫して、便船を以て明光丸の跡を追つて長崎へ行くことにした。

龍馬は餘程癪に觸つたと見えて紀州人の不誠意を詰り、「何れ血を不見ばなるまいと存じ居候」と同志へ送つた手紙の中に書いてゐる。三吉慎藏へは萬一の時には妻龍子を本國へ送り返すから宜敷頼むと手紙を書いてゐる。龍馬の決心の異常だつたことがわかるのである。

五月十三日、龍馬は長崎に赴いて後藤象二郎及海援隊の諸士を集め、衝突沈没の實況及び鞆

の津の非禮を告げ、理非曲直を論議した。皆々彼に非の在るのを認めためたので明光丸船長高柳楠之助を訪ねて十五日、彼我公式の談判を開いた。伊呂波丸は土州藩の附屬船の名に依つて交渉を開始したのだ。兩藩の談判應答は詳細な記録に取つた。これは今日で云ふと海損に關する重要な法律上の手續であつて、龍馬が當時既にかうした方面にまで頭を働かしてゐたかと思ふと彼がいゝ意味での商才に長けてゐたこと驚くばかりである。

たとへ幕府の親藩であつても恐れる所はないとして、紀藩の長崎派出官に向つて償金を請求したが容易に應じないので長崎奉行に判決を乞ふたが、紀州藩に肩を入れて此方に不利な條件で和議せしめようとするので、龍馬は敢然之を拒絶した。何時までたつても埒が明かないので龍馬は一計を廻らし、

へ船を沈むるそのつぐなひは

金を取らずに國を取る

といふ俗謡を作つて隊士たちに丸山の妓樓で唱はせるとたちまち市中にひろがつた。このい

やがらせとおどかしとが利いて紀州藩ではふるへあがつた。

遂に双方立會の許に各々の主張を筆記させて、之を萬國公法に訴へて英國水師提督の公明なる審判を訊く事になつた。

すつたもんだの末、償金八萬參千兩を出させることになつたので龍馬は其成功に欣喜雀躍した。

龍馬の家信の一節に、

……皆人の申候には、此龍馬が船の論たるや、日本の海路定則を定めたりとて、船乗等は聞きに參り申候。

とある、龍馬の得意や思ふべきである。

その事あつて以來、海援隊の威勢益々揚り、海上を横行して誰れに憚るものなく、敵するものもないといふ有様であつた。

一方、宇内の形勢は愈々日に増し切迫して來て、討幕の義兵將に起らんとしてゐた。龍馬は

竟に意を決して海援隊を擧げて全部、之を岩崎彌太郎（三菱會社の創設者）に依頼し、衆を率ゐて上京したのであつた。

これからが大政返上の大業に本腰を入れることになるのである。

大政奉還の氣動く

坂本龍馬は慶應二年九月中、長崎に於て越前藩士下山尙に向ひ、切に「幕府政權返上」の策を説いて松平春嶽に告げしめ、同公をして其の任に當らしめようとした。

下山は歸途熊本へ立寄つたので龍馬の秘策を小楠横井平四郎に話すと、小楠は手を打つて賛成し、

「此の大任は春嶽公を措いて他に其適任者はないと存じ申す」と言つて、自身も亦意見書を春嶽に托した。

然し春嶽は遂に其意を決することが出来なかつた。十五代將軍慶喜をして大政を返上するの大業を敢て行はしめたのは土州の山内容堂が與つて力あつたのは勿論としても、夙に此事を首唱した坂本龍馬・中岡慎太郎の兩名を等しく推賞しなければならぬ。特に龍馬の如きは、いまだ輿論の喚起せられなかつた慶應二年九月中に既に春嶽に試みてゐたのであるから……。

慶應三年三月、中岡慎太郎は薩摩人から岩倉具視が隱然王政復古派の謀主であるとの秘密を聞き知つたので三條實美に、

「岩倉と結盟して、内外呼應しては如何」

と報告すると實美は、

「あんな奸物と何で事を共にするものか」と言ふ。傍にゐられた東久世通禧卿は取なし顔に實美に、

「彼は決して幕府に身を賣るものではない。和宮降嫁に賛成したのも謂はゞ一時の權謀だけである」と忠告された。

二人からさう言はれてみると實美も氣色ばんでゐた顔色を柔らげて、遂に中岡が上京する手書を托して岩倉に届けさせ、内外相應じて王政復古の大目的へ向つて素志を貫徹する事に誓つたのである。

是れは實に中岡慎太郎が薩長和解運動に盡した功績に亞ぐべき一大功勞である。即ち維新中興の元勳である三條・岩倉の兩卿は實に此時から相結ぶ端を發したからである。

中岡慎太郎が岩倉具視に初めて面會し、實美の書面を手交したのは四月二十一日であつた。中岡の手記に――

同二十一日 晴、前田氏に逢ひ岩倉氏初て面會。

同二十二日 雨、西郷面會、昨日聞く所の事を糺す。云々。

同二十三日 晴、烏公に出る。地球萬國の圖「西洋事情」を獻す。

中岡は岩倉に會つてみると其器量識見共に大したものなので悉く感服して了つた。そこで坂本龍馬が入京して來ると中岡は彼を伴れて行つて岩倉に紹介した。この時分はもう土州藩の藩

論も決定を見て、容堂は左の直書を家老中に示して四月二十七日海路を大阪に入り、五月一日には入京して來た。

我等爲皇國致上京、於兵庫外夷と開港期限延及應接、若不承服時は及戰爭候に付對討幕是亦及戰爭候事も難計、何れ京師の土と可相成と致心痛候、依而家老以下何れも左様可相心得被仰出之。

中岡慎太郎は西郷隆盛・吉井幸輔の兩名のみに乾退助（板垣退助）を起ち上らせねば土州藩を討幕の軍に参加させることが出來ないと考へたので、吉井が代つて江戸に於て乾と天下の時勢に關して談じてみたところ彼も意見に賛成することが出來た。

中岡は藩主容堂の入京と同時に、書を江戸に在る乾退助に送つて西上を促したので乾は京師に入つて來た。

當時長藩の品川彌次郎は京師の薩摩藩邸に來る毎に西郷隆盛に討幕の兵を動かすべしと説くのであつたが、西郷はいつも「時機尙早し」と言ふばかりなので、品川はいらだつて其の理由

を詰問すると、

「今や一橋慶喜幕府に立ち十五代將軍たるぢやごわせんか、天下は彼の手腕に俟つて新しい政治を希望して居りますぢや、こつちの方から戦ひを挑む可き時機ではごわせんたい。それよか他日當然彼が破綻百出の際にこそ問責の檄を飛ばして一舉に事を決する方よかたい」と遁げ口上を言ふのであつた。

——しかし西郷の胎は、かういふ風に自分が煮え切らないでゐれば却つて土藩その他の連中の血を沸々とたぎらせて西郷頼むに足らん、討幕は我等の手で——と勢ひ自らそこへ趣かしめるであらうとの深慮からであつたのだ。

乾は翌五月二十二日、容堂に調した時——

「君公の御左右には幕府方に誼みを通じて居る者がござります。申上げる迄もなく今日の時勢は大義親を滅するの秋と存じます。今にして御決心を遊ばさねば他日御馬を島津、毛利兩家の門に繋ぐ事になるやも計り知れませぬ」と直言した。

容堂は默然として一語も發せられない。乾は更に聲を勵まして、

「關東浪士の一團は將に暴發せんとして居ります。しかも君公の御名を慕つて何時にても起ち上れるやう集結して居ります。私奴彼等を築地藩邸内に一先づ押し鎮めてありまするが、彼等を放ち申しませうや」と殺氣立つのを容堂はたつた一言——

「放つ可らず、汝の慰撫を要す」と言はれたので、他日乾退助は屠腹の厄を免かれたのである。

中岡慎太郎稿『時勢論』

中岡慎太郎は舊稿の「時勢論」を補正修飾して、雅味のある穩健な文章とした。時勢論とは彼が乾等郷國の同志の爲めに滿腔の經綸を吐露したものである。完成した時勢論は……

時勢論

窃かに古今宇内の盛衰得失を察するに一治一亂は勢の止むを得ざるもの也、一張一弛は治

國の要務也。非常の難を釋くものは常道を以て見るべからず。抑も和漢古今及西洋各國其國政の張るや、必ず大英斷を施し大危難を經、一朝其舊弊を除き始めて其國の政教の一新を見るべく國體是に於てや立つ。未だ周旋と議論とに始終して國を興し難を釋く者を聞かざる也、世上往々議論周旋する者あり、其言に曰く、皇國一和以て政教を立つる也。武備充實以て國威を張る也。信義以て外國に交る也と議論愈々密に周旋益々極り、而て未だ其實効を見ざる也、何となれば是言ふべくして行ふべからざるの理也、抑も癸丑以來、皇國一和武備充實紛々たる説あり、始め三港條約の成りし時、久阪義助なる者、「回瀾條義」を著す、其言に曰く、今已に三港定約の成りし上は廣く有志の者を海外に遣はし、西洋の諸學諸藝及工商の術を學ばしめ、大に海陸の軍備を張るべし。此の如くせざれば以て國體を立つるに足らずと其後幕府益々妄行、諸藩日々に因循苟安、會て其効を見ざるに至る、是に於て始めて其言の空論施すに足らざるを知り、壬戌の年に至り義助又「解腕痴言」を著す、其説に曰く、今日、天朝勅諭確々奉ぜざるべからずと。斷然攘夷の説を決して曰く

苟くも吾輩節義を以て天下を動かし、一死以て皇恩に報ひ、一朝不測之難を神州に引受け百戰の厄を經る豪傑其間に興るにあらざれば、何を以て土崩の患を防ぐに足ると、高杉春風も亦曰く、今日西洋事情を説き、彼を知るを以て自ら負ふ者纔かに西洋の一端を見て會て古今盛衰の機の由る所を知らず、當時彼の盛強なる尤も其本既にあり。今日吾邦に於て彼の盛なるを學ばんと欲せば、英佛等の未だ盛ならざる時、内戰度々有之し事、又魯西亞の百戰危難の中より國を起せし事など斟酌し、模範とすべし、若し吾が國今日の弊勢を以て彼の盛強文明已に治まりたるを座ながら學ばんと謂はば大間違也、故に曰く、宜く奇變英達實行を以て天下を一新すべしと。

嗚呼兩士已に去る、復た兩士に對して今日の事を議する能はず。然りと雖も幸に其言に因て聊か今日の治論を助くるに足る、今已に歴觀せし所の一二を證せん、壬戌の年薩州の壯士英人を生麥村に斬る、其後英軍鹿兒島に入り罪を問ふ、時論多く、曰く薩州大なりと雖も英國之力を以て攻むるに至りては決して支ふべからずと、然るに此一戰に依て士氣大に

奮ひ、俗論漸く沮し因循苟且の弊漸く破れ、所謂攘夷家なる者も先んじて航海練兵の實用を主張するに至り一藩の國是定りたり、又長州に於ては屢々夷船を暴撃し、甲子京師に敗軍し續て馬關の大敗あり、又追討の兵を四境に受く、此時人皆思へらく、防長の滅亡疑なしと、豈計らん、長州は一國の政事を改革し、兵制を一新し、士氣大いに奮ふは、全く此一危難に由て也、又幕府昨年討長の敗軍に人皆思へらく自今幕府恐るゝに足らずと、何ぞ計らん幕府海陸兵政の奮ひしは亦此敗軍の機に由て也、凡そ機會の間常眼を以て見るべき難し。此の如き活動の機、卓識英斷並び行ふ。義助春風の如き非常の士にあらざれば見難き也。然るに天下今日因循苟且の弊、尙ほ未だ其百分之一を改むるを見ず、夫れ世間因循傍觀區々として只人の失策のみ求め、笑ひ座して天下の機會を失し、甘じて人の後に落つ此の如き碌々愚弱の徒固より論ずるに足らず、其他世に所謂有名の藩なる者に至ては此理を知り、勢を辨すと雖も未だ其効なきは何ぞや、是れ亦恐くは成敗の間に疑惑し事に臨んで斷ずる事能はず、未だ因循苟且の弊を脱せざる也。古人曰く、斷大事者先忘成敗と、

此れ實論也、事機の得失前證の如く、敗素より憂ふるに足らず勝却て恐るべきあり、若し此機を知り著眼一定して百敗撓まざる時は天下萬事成らざる稀也、然るに國に大義あり公道あり、戦求めて得べからず、只管大義を踏み、公道を行ひ一步も退かざれば已むを得ざるの機決必ず目前に至らん、此れ前件勢を論ぜざるを得ざる所也。吾神州危急存亡今日に至て極れり、苟も其國民たる者豈傍觀すべけんや。誠に古人云ふ所の如く、邑ある者は邑を擲ち、家財ある者は家財を擲ち、勇ある者は勇を振ひ、智謀ある者は智謀を盡し、一技一藝ある者は其技藝を盡し、愚なる者は愚を盡し、光明正大、各々一死以て至誠を盡し、然後政教立つ可く、武備充實、國威張る可く信義外蕃に及ぶ可き也、克く斯の如くすれば豈、皇運挽回の機なからんや、豈外藩を制するの術なからん哉、滿腹の婆心聊か書して、知己の忠告を待つと云爾。

丁卯夏月

於京師之潛居書

中岡慎太郎は、それから谷、毛利と謀つて大阪で「アルミニー銃」三百挺を購ひ入れ、之を

同志に配付する計畫を爲し、乾退助は容堂に扈從して歸國したのである。

山縣狂介の葉櫻日記

長崎に在つて紀州藩光明丸と伊呂波丸との衝突沈没事件の談判に成功した後藤象二郎と坂本龍馬は、紀藩士山本一郎と共に六月上旬「シユリン」船に搭乘して長崎を發し、途中馬關に寄港したので、龍馬は後藤に木戸（桂小五郎は既に木戸孝允と稱してゐた）を紹介しようとしたが、木戸は山口に去つてゐて其機を得ず、六月三日相携へて京師にやつて來た。

その時京都では中岡慎太郎が乾退助等の歸國を送つてから後、在京の同志と討幕舉兵の準備に着手してゐた。

即ち中岡は京都で「陸援隊」を組織すると、各藩の脱藩同志を糾合して萬一に備へるべく、薩藩の小松帶刀に金三千八百兩の借用を申込んだり、又新に東京して來た土州藩の執政深尾左

馬之助や、大監察山川左一右衛門等を訪問しては薩長の討幕舉兵の期の迫りつゝあるのを警告したりした。

一方西郷隆盛は、最早此期に及んでは討幕舉兵の外なしと觀念したので、長州藩の山縣狂介や、品川彌次郎が歸國しようとするのを引留めてゐたが、恰も龍馬、後藤がやつて來た其翌日、西郷自ら山縣・品川の兩名を訪ねて愈々討幕の決意あるを告げ、六月十六日山縣狂介（有朋）を薩摩藩主島津久光に引見させた。久光は山縣に六連發のピストルを贈けして、近く薩長聯合で大學して行ふ討幕の密旨を授けて長州藩士に報告させたのである。

山縣の「葉櫻日記」に――

六月十五日

歸朝遷延、西郷來、劇談時務。

同 十六日

薩公手づから六連砲をたまはりければ、

向ふ仇あらば打てよと賜りし

筒の響も世にや鳴らさむ

山縣は右の密旨を帯び、田中顯助（光顯）と共に十七日京師を出發して歸國の途に就いた。途中田中顯助は中岡慎太郎の依託によつて太宰府に赴き、五卿に京師の形勢を報告したのである。

龍馬の八策

龍馬は幕府の海軍が新たに戦闘力を加へて來たのに注意を拂ひ警戒してゐたので、中岡慎太郎に、

「薩長は味方の陸軍だけを信頼して京阪の地で幕府と戦はうとばかりしてゐるが、幕府はその裏を掻いて必ず幕下の海軍で攝海方面を封鎖し出すと儂や睨んどる、ぐづくはしとれんゾ。

ところで乾ぢやが、折角同志の蹶起を誓約して力瘤を入れとるが、薩藩ぢや老公（容堂公）に討幕の御決意ないのを知つて我々土州藩を度外視して大事を擧げようとしとる。それでぢや、此際われわれの執るべき方法としては、議論を以て幕府に政權を奉還せしむるの議を土藩から提出するのが穩當にして且つは捷徑ぢやと思ふ。幸にその儀が容れられればよし、若し幕府がわれわれの意の存するところに従はず拒むことにでもなつたら、其時はその罪を鳴らして土藩も亦藩長と共に討幕を決意したらどうぢや」と何時になく龍馬の意見が消極的なので、中岡は兄事してゐる彼への手前表面は首肯したかに見せてゐたが、腹の中では——干戈を以て成敗を一舉に賭する決心だつた。

龍馬は此意見を後藤象二郎にも話してみると、彼は中岡とちがつて腹から賛成して、「それぢや一つ其の綱領を發表して頂きたいナ」と言つた。

其處で龍馬は彼の秘書長岡謙吉に綱領草案起草させた。即ち從來の大義名分的王政復古論

以外に、それに加へるに世界的開國進取の新經綸を以てして、其の政權返上案の目的を神聖雄大なものたらしめたもので、是れが世に所謂「龍馬の八策」なるものである。

第一義 天下有名ノ人材ヲ招致シ顧問ニ供フ。

第二義 有材ノ諸侯ヲ撰用シ朝廷ノ官爵ヲ賜ヒ現今有名無實ノ官ヲ除ク。

第三義 外國ノ交際ヲ議定ス。

第四義 律令ヲ撰シ新ニ無窮ノ大典ヲ定ム、律令既ニ定レハ諸侯伯皆此ヲ奉ジテ部下ヲ率ス

第五義 上下義政所

第六義 陸海軍局

第七義 親兵

第八義 皇國今日ノ金銀物價ヲ外國ト平均ス

右豫メ二三ノ具眼士ト議定シ諸侯ノ會盟ノ日ヲ待ツテ〇〇〇自ラ盟主ト爲リ此ヲ以テ「朝廷」ニ奉リ始テ天下萬民ニ公布云々強抗非禮公議ニ違フ者ハ斷然征討ス權門貴族モ假借ス

ルコトナシ

慶應丁卯十一月

坂本直柔(岩崎小彌太男藏)

實に立派な内容である。第一義の如きは宛然今日の大政翼賛運動の根本趣旨と同じである、第四義の律令を撰定せよといふあたり「新日本」の開眼を豫言されたかに思はれ、第五義は今日の貴衆兩院、第六義の陸海軍兩省等々その一として今日の「世界日本」を約束づけぬものがあらうか。

後藤象二郎之を一見して、

「絶妙」と感嘆した。そして、

「僕之を容堂老公に御説明申上げて、土佐の藩論を以て、正々堂々幕府に大政返上を迫り申さう」と誓つた。龍馬は龍馬で薩藩にも説いて賛成させようと思氣軒昂たるものがあつた。(一) 説には當時長岡の起草した箇條は拾參まであつたといふことだが、第九、第十、第十一の文字は世に傳はつてゐない。

大政返上論頻々

後藤象二郎は入京の翌晩、土藩の福岡藤次と眞邊榮三郎とに會見して薩藩と行動を共にしようとして一決したし、中岡との初對面の際もこの決心を告げてゐた。

乾退助は歸國後大監察に復職して軍備改正主任となつた。六月二十一日土藩參政由比猪内は大監察佐々木三四郎と一所に入京して大政返上案の提議があると聞いて大いに喜んだ。翌廿二日京都三本木の旗亭で薩土兩藩の龍馬・中岡・佐々木・後藤・小松・西郷・大久保の面々が會合して、兩藩の間に左の四ヶ條から成る「覺書」を決定した。

約定之大綱

- 一、國體を匡正し萬世萬國に亘り不恥、是れ第一義。
- 一、王制復古は論なし、宜しく宇内形勢を察し參酌協正すべし。

一、國に二帝なし、家に二主なし、政刑唯一君に歸すべし。

一、將職に居て政柄を執る、是れ天地間、有るべからざるの理也、宜しく侯列に歸し、翼載を主とすべし。

右方今の急務にして天地間常有の大條理也、心力協一にして斃れて後已ん、何ぞ成敗利鈍を顧るに暇あらんや、

丁卯 六月

其翌二十三日は土藩在京重役と新に出京した重役と貸席「松本」に會議、大政返上の藩論を一定して、前日龍馬が後藤に渡した「八策」の初稿を次のやうに修正した。

- 一、天下の政權を朝廷に奉還せしめ、政令宜しく朝廷より出づるべき事。
- 一、上下議政局を設け、議員を置きて萬機を參贊せしめ、萬機宜しく公議に決すべき事。
- 一、有材の公卿諸侯及天下の人材を顧問に備へ、官爵を賜り宜しく從來有名無名の官を除くべき事。

- 一、外國の交際宜しく廣く公議を採り、新に至當の規約を立つべき事。
- 一、古來の律令を折衷し、新に無窮の大典を選定すべき事。
- 一、海軍宜しく擴張すべき事。
- 一、御親兵を置き、帝都を守衛せしむべき事。
- 一、金銀物價、宜しく外國と平均の法を設くべき事。

以上八策は方今天下の形勢を察し、之を宇内萬國に徴するに之を捨て、他に濟時の急務とし、苟も此數策を斷行せば皇運を挽回し、國勢を擴張し萬國と並立するも、亦敢て難しとせず、伏て願はくば公明正大の道理に基き、一大英斷を以て天下を更始一新せん。

此の夜、毛利恭助は佐々木三四郎と伴れ立つて龍馬・中岡の所見を正すために喰々堂に密會した。佐々木の日記――

廿三日 晴、借席松本に會議す、大政返上云々の建白を修正す、夫より、毛利恭助同伴にて才谷梅太郎（龍馬）、石川誠之助（中岡）兩人の意見を聞く爲め喰々堂に密會す、夜に入

り歸宿す、今夕大雨雷鳴あり、此日、才谷曰く、吾藩は是迄幾度も藩論變じたる故、薩藩も未だ疑念解けず、此度は、充分目的相立て、變換無之を要すと、自分曰く、尤なる事也然れ共此度は最早時勢も切迫せる上に後藤を初め是迄の佐幕家も、大政返上の事に熱心せり、如何相成候とも此度は孰とも踏込まねば不相立場合に乘込み候間、何とか充分の芝居は出來得べし安心あれと、才谷笑て曰く、何か又芝居出來るとは名言なり、何にても宜敷一芝居興行すれば、夫より事始るべし云々、才谷石川兩人の考にも大政返上等の事を吾藩主張し、其の主人と相成候はば薩藩も必ず信用すべし、薩長人も土佐より何かの心算あらんと思ふなり、充分盡力ありたしと云々。

其他薩藩や薩藩に夫々「約定書」を交付して結束を固めたのである。

龍馬が所謂「八策」の原案を後藤象二郎に手交したことは同士福岡でさへ明治維新後も知らなかつたといふのは、龍馬に深い考へがあつたからで後藤自身の創案の如く見せかけておいて土州藩重臣の信用を得るに努めたのである。

龍馬の「八策」は實に維新中興の原動力となつたのみか、昭和現代大政翼賛の聖業にまで脈々として其源泉たる誇りを持つものである。

中岡陸援隊長

慶應三年七月廿六日、龍馬は中岡と一所に岩倉具視を訪ねて王政復古の意見を交換し、愈々三條實美と氣脈を通じ三條卿は長州に推され、岩倉卿は薩藩に擁せられて内外相應じ前途の大計畫を企てる事に決定した。

中岡は龍馬の海援隊の例に倣つて在京の志士は萬一の時は何れも物の役に立つ者だから、この人たちを一ヶ所に收容する「陸援隊」の根據地を造りたいからと毛利を説き、更に佐々木を説得した。そこで大監察の佐々木は更に土藩の參政由比を説き勸めて、白川の藩邸に陸援隊の根據地を置く事に決定したのである、佐々木の左の手記は――

右白川邸へ人數入れ置き候儀は先日石川誠之助（中岡）より申來り候には此頃常より又々浪人狩り相初め候様に被察候、其譯は柳馬場に下宿の對州浪人橋某既に捕縛せられたる由就ては吾々の同志其處々下宿致し居候てはは危険に付一纏に致し度白川邸に御差置き願度との事、内密申出で候、然るに政府中もまだ十分に勤王論も無之漸く大政返上建白等の事には内々相運び居候得共浪人等をば餘程相忌み候者多く……（中略）……猥りに手を下し兼候場合に付自分より由比猪内に事情能々相談候處同人は存外に時勢相分り居り參致中にも上席株にて漸く同意致し呉れ候間他に異論不差起中と急速に相運び候様取扱致し候、幸に御徒目附樋口眞吉も同志なり、其以下、下横目にて唯次郎（森脇）、健三郎（岡本）、雄之進（山本）等孰も同志なれば異論無之中、自分一手にて爲相運候事なり、殊の外多忙にてありしなり、今日の事情實に六ヶ敷事なり、他日罪人と相成候事は覺悟之事也。

かういふ經緯で中岡慎太郎は自ら陸援隊長となつた。彼の僕で伏見街道で刀鍛冶をしてゐる安藤新太郎を伴れて白川の邸に乗込んだ中岡は其所で横山勘藏と變名したのである。

さて中岡の陸援隊組織の吉報に接して白川の邸へ續々繰込んで来た連中は――

○岩倉の片腕の小林敬介(香川) ○大橋愼三(橋本鎮猪) ○熊本の藤村紫朗 ○對州の津田良介 ○關東の川上邦之助、中野幸助、木村誠吉 ○備中の松林織之助 ○秋田の伊藤源助 ○伊豫松山の中村新太郎、其の僕松太郎。

以上を初期の入邸者として更に第二陣として、

○江州の三宮耕庵(義胤) ○水戸の小田小二郎(河邊春次郎) ○江州の樹下岩見守(耕雲茂國) ○常州の早川仙太郎(黒澤銃太郎) ○水戸の中川秀五郎、田邊健介、田崎敬助 ○豊橋の山本一郎 ○伯耆の大村真介(中島貞五郎) ○土藩の木村辨之進、中山敬造。等が入邸し、八月に入つてからは、

○尾州藩の田村十郎(爲田九郎) ○參州の浦島三郎(小山徹太郎)、坂田甚作、谷喜三郎、村田一齋(武内藤左衛門)、榎田甲子太郎(後に脱邸)、○水戸の芳野昇太郎、淵川忠之助、岩崎誠之助、平井喜代三、飯田種彦 ○京都東本願寺の高橋九一 ○大和の丸野八郎 ○備中

の岡田範三 ○豊橋の山本二郎 薩州の海江田耕平 ○長州の村山健吉。等が入邸した。

尙中岡は、十津川に山崎嘉都馬を使者に立てて定正源馬を迎へた。八月十五日には田中顯助(光顯)が入京して來て異議なく入隊する。この二人はそれからといふもの中岡の股肱となつたのである。

當時の事を田中光顯伯(顯助)の書かれた例の「維新夜話」の中から拜借する。――私(光顯伯)は八月十五日長州をたつて又京都へ戻つて來た。そして今度は薩摩屋敷には入らず白川の土佐藩邸にある陸援隊に入つた。陸援隊と言ふのは坂本の海援隊に對して中岡が組織したものであつた。當時は諸藩の有志が各所に散在して居つたので、いざ事を擧げるといふ場合甚だ不便であつた。のみならずその保護を加へるものもなかつた。そこで中岡が藩の重役福岡藤次(前掲は佐々木三四郎)、毛利夾輔(前掲は恭助――田中伯の文章を尊重してこの儘にして措く)等に談じて白川の邸をかりうけ同志を收容した。従つて隊員は土藩のものばかり

ではなく各藩のものが收容されてゐた。その隊規は——(一五〇頁「海軍は龍馬、陸軍は中岡」の項参照)

岩村精一郎(後の通俊)や齋原治一郎(大江卓)等も此の時私をたよつて來た連中で、

「差當り落つく場所がない。是非一つ陸援隊に置いてくれんか」と言ふので邸内の長屋の一つをあてがつた。當時私は、

「退屈だらうからこんなものでも読んで見たらどうか」と言ふて兩人に『聯邦史略』と『地球説略』とを貸し與へた記憶がある。此の頃の京都の模様を國許に居る父に報告した私の書面が残つてゐる。その末節には、

薩長は疑なく大舉に到り可申候、土州も其尾にすがり附、一舉出來申さずては汗顔の事に御座候、さて先日以來京師近邊歌に唱へ候には大神宮の御祓が天より降ると申して大に騒ぎ居申候、大國天・蛭子觀音等種々のものが降り候趣近々甚しき事に御座候、切支丹にて御座あるべく存ぜられ候、過日はどこかへ嫁さまが降り候處江戸の産の由に御座候、何が

ふり候やら知れ申さず候、只々彈丸の降り候を相楽しみ待居申候。

と書いて居る、これは所謂お札踊の流行をさしたもので、京師を中心に大阪に流行し一時は關東の方にまでも及んだ位であつた。

天下は今や危機をはらんで正に一大風雲を捲き起さうとしてゐる時、何處からともなくそれ等のお札が舞ひ下りて來る、すると京の市民達は、

「吉兆ぢや〜」と言ふのでそのお札の降りた家では酒肴をととのへて大盤振舞をする。そして屋臺を引つぱり出し太鼓を叩き鉦を鳴らしなどしながら、

「えゝぢやないか、」と繰返し町中を練り歩く。それは假装したりなどしてまるで祭りのやうな騒ぎである。その騒ぎの中にあつて薩長は秘かに討幕の機をじつと覗ひ、計畫をめぐらしてゐるのである。雲か風か山雨正に驟らん有様である。

實に陸援隊は幕府の近藤勇等の新選組に對抗して志士の間にも重きを爲したものである。……

陸援隊は隊長中岡慎太郎が龍馬と共に横死した後も岩倉具視等の指揮を受けて伏見鳥羽の開戦に先立ち、全隊擧げて鷲尾侍従に従ひ内勅を奉じて高野山に出陣さへしてゐる。

老獺英國公使パークス

中岡が陸援隊を組織してゐた時、在京の土州藩の重役たちをびつくりぎやうてんさせる事件が起きた。それは龍馬や中岡たちが京師に在つて日夜八方國事に奔走中の慶應三年七月六日の夜、福岡藩士金子才吉が柳暗花明の巷、絃歌のさわめき繁き所、長崎丸山の遊廓の往來でイギリス軍艦の水夫二名を斬殺し一應逃走したのだが、後難の藩主に及ぶべきを恐れて八日夜窃に自殺して了つたので誰れ一人下手人が金子であることを知る者がなかつた。

さあ大變である——長崎奉行では晝夜加害者の搜索に狂奔してゐた時も時、折も折、兇行の翌七日に海援隊の洋帆船横笛丸は信號の笛を吹かずに長崎港を解纜して了ひ、おまけに又其夜

土州藩の胡蝶丸も船出して了つた。そして、も一つおまけに金子の捨てゝ行つた提灯が上下朱の中白と来て海援隊の定紋だからたまらない、どうしたつて嫌疑は海援隊にかゝり、幕吏は海援隊士の處業と睨んで土藩に調査を迫る、イギリス公使は幕府に嚴重に掛合つて來るといふ始末である。

すつたもんだで西郷隆盛まで間にはひつて心配する。龍馬は心配の餘り歸國してみたが二度も脱藩してゐる身だ、いくら後藤象二郎が吞み込んで罪は免ぜられたことになつてゐても表面はそれでは通らない。越前侯松平春嶽の使者として事に當らうと苦肉の策に出たが、「龍馬が歸藩すると佐幕派のまだ多い藩廳が紛めるゾ」と心痛する向きもあつて却々埒が明かない。容堂公も眉をしかめて、「さて／＼内外やかましき事かな」と嘆聲を漏らされる。

八月六日、イギリス公使「パークス」一行を載せたイギリスの軍艦が須崎に入港する。物情騒然たる折柄、薩摩・幕府・イギリスの艦船が相踵いで入港する——風聲鶴唳といふ奴で幕府の船をまでイギリスの船だと思ひ違ひして三隻の艦船が攻めて來て、わめき騒ぐ。